

2018 年 1 月 30 日

2017 年度聖路加国際大学大学院課題研究論文

母親となる女性の
ジェンダー及び多様なセクシュアリティに関する
知識と態度の調査

A Survey of Pregnant Women's
Knowledge and Attitude of Gender and Sex Diversity

学生番号 16MW001

氏名 浅倉美貴

第1章 序論.....	1
I. 研究の背景.....	1
II. 研究目的	2
III. 研究の意義.....	2
第2章 文献の検討.....	3
I. セクシュアリティの構成要素.....	3
1. 生物学的性	3
2. 性自認	3
3. 社会的性役割.....	3
4. 性的指向.....	3
5. エロティシズム・喜び・親密さ	4
6. 生殖	4
II. 多様なセクシュアリティ	4
III. ジェンダーの発達.....	4
IV. 子どもを取り巻くジェンダー.....	5
1. 家庭	5
2. 保育・教育	6
V. まとめ	6
VI. 用語の操作的定義.....	6
第3章 研究方法.....	8
I. 研究デザイン	8
II. 研究の対象.....	8
1. 研究対象施設.....	8
2. 研究対象者	8
3. 研究の対象人数.....	8
III. データ収集期間	8
IV. 測定用具	8
1. 性役割に対する態度：平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)	9
2. 多様なセクシュアリティに関する知識	9

3. トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度	9
4. 子どもの性に関する自由記述	10
5. 対象者の属性	10
V. 調査手順と方法	10
VI. データの分析方法	10
VII. 倫理的配慮	11
1. 研究方法に関する倫理的配慮	11
2. 研究対象者に対する倫理的配慮	11
第4章 結果	12
I. 対象者の特性	12
II. 性役割に対する態度	12
1. 各項目の回答	12
2. 性役割に対する態度の得点と関連項目	14
III. トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度	16
1. 尺度の信頼性	16
2. 各項目の回答	16
3. トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度得点と関連項目	16
IV. 多様なセクシュアリティに関する用語の知識	18
1. 各項目の回答	18
2. 多様なセクシュアリティに関する用語の知識得点と関連項目	18
V. 多様なセクシュアリティに関する知識	19
1. 各項目の回答	19
2. 多様なセクシュアリティに関する知識得点と関連項目	20
VI. 多様なセクシュアリティに関する態度や知識の関連要因	21
1. 性役割に対する態度と関連要因	21
2. トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度	22
VII. 子どもの性に関する自由記述	22
第5章 考察	24
I. 母親となる女性が受けた教育	24
II. 性役割に対する態度と関連する因子	24

1. 性役割に対する態度.....	24
2. 性役割に対する態度に関連する因子.....	25
III. トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度に関連する因子.....	26
IV. 多様なセクシュアリティに関する知識.....	26
V. 母親となる女性が子どもの性に関して抱える不安.....	27
1. 子どもの性の多様性を受容できるかという不安.....	27
2. 性教育の実施や子どもの性に関する支援方法についての不安.....	28
3. 親の性役割に対する態度が子育てに及ぼす影響.....	29
VI. 本研究の限界と今後の課題.....	30
第6章 結論.....	31
文献.....	32
資料.....	41

第1章 序論

I. 研究の背景

WHO は、セクシュアリティについて、生涯を通じて人間であることの中心的側面をなし、生物学的性、性自認と性役割、性的指向、エロティシズム、喜び、親密さ、生殖がそこに含まれるとし、性の健康が達成され維持されるためには、すべての人々の性の権利が尊重され、保護され、満たされなければならないと述べている。近年、日本の社会の中で、生物学的性、性自認、性別表現、性的指向について多様なセクシュアリティの存在が認知され、人権の尊重に向けて様々な分野で変化が生じてきている。米国精神医学会は、精神障害/疾患の診断・統計マニュアル第5版(DSM-V)において「gender identity disorder(性同一性障害)」を「gender dysphoria」に変更し、「疾患」「障害」としての語義を薄めた。これを受け、日本精神神経学会は2014年に、「gender dysphoria」を「性別違和」と訳したことを公表した。中塚(2016)は、これによって「性同一性障害」の脱病理化が図られていることに言及しているなど、医学における概念も変わりつつある。

多様なセクシュアリティの人々に関する調査によると、LGB といった多様なセクシュアリティの成人は、カナダで1.9%、オーストラリアで2.1%、アメリカで3.4%の割合で存在する(Gates, 2011; Gates, 2012)。トランスジェンダー等その他多様なセクシュアリティの人々、未成年者の存在も鑑みると、さらに多くの割合で存在していることが推測できる。文部科学省は、学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査(2014)において、性同一性障害に関する606件の教育相談等があったことを報告している。同省は、この調査結果を受けて「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施について」という通知を出し、学校教育における多様な性への対応を示した。

中塚(2013)の調査では、性同一性障害当事者の子どもの頃に関して、当事者のほとんどが誰にも打ち明けることができずに悩んでいたという事実を明らかにしている。杉浦(2013)は、性別違和感を持つ子どもとその親の親子関係について、「親に理解される」「親に理解されない」ことが診断や治療の判断基準となる場合があり、このとき性同一性障害は「親は理解者でなければならない」という前提を確認させる概念となると考察している。また、坂口、橋本(2009)の調査により、母親の性役割態度が養育行動と子どもの社会的行動の発達に影響を与えることがわかっている。家庭は、親が子供に対してさまざまな価値観や規範を身につけさせ、期待をかけ、社会的適応を促す社会化の場である(土肥, 2011)。藤田(2007)は、幼児

の保護者を対象とした調査の結果、保護者が子どもに対して抱く将来の期待に関して、女の子には「かわいらしさ」を、男の子には「身体的能力」を期待しており、子どもは保護者より「ジェンダー化」された期待をされていることに言及している。また二分法的なジェンダー観を持つ保護者はそれぞれの性別らしい服装を求め、ジェンダーを意識したしつけを積極的に取り入れる傾向にあった。

文(2015)が、母親の教育価値観及び子どもへの期待が養育態度に与える影響について調査を行っており、教育価値観や子どもへの期待と養育態度との間で有意な相関が見られている。このことから、母親を始めとする子どもを取り巻く周囲の成人が正しい知識を持つこと、多様なセクシュアリティに理解を示すことは、子どもの社会的態度や発達に影響を及ぼし、ジェンダーやセクシュアリティの悩みを持つ子どもの生きやすさにつながるということが推測される。しかしながら、女子大生を対象としたジェンダー・バイアスに関する調査(百瀬, 2006)はあるものの、子育て中の母親、またはこれから母親となる女性のジェンダー・バイアスや多様なセクシュアリティに関する態度に焦点を当てた調査はほとんどなされていない。

II. 研究目的

本研究は、子育て中の母親または母親となる女性の性役割に対する態度、トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度、多様なセクシュアリティに関する知識について明らかにし、これらに関係する要因を探索することを目的とする。

III. 研究の意義

母親となる女性のジェンダーや性の多様性に関する知識や態度を知ることにより、ジェンダーやセクシュアリティに関する正しい情報の提供や教育のあり方を探索し、多様なセクシュアリティに関する家庭支援を検討するための一資料になると考えられる。

第2章 文献の検討

I. セクシュアリティの構成要素

セクシュアリティは、生涯を通じて人間であることの中心的側面をなし、生物学的性、性自認と性役割、性的指向、エロティシズム、喜び、親密さ、生殖がそこに含まれる(World Association for Sexual Health, 2014)。

1. 生物学的性(身体的性別)

性染色体、性腺、性ホルモン、内性器、外性器等の身体的な男女の性別を指す。従来は男女へ明確に二分されるべきものと考えられてきたが、性分化疾患を有する者は **intersex** として自らの性自認を持つこともある(針間, 2016)。

2. 性自認

性自認(ジェンダー・アイデンティティ)とは、自分を女性だと感じるのか、男性だと感じるのか等、どのような性別に帰属意識(アイデンティティ)を持っているかを表す概念である(遠藤, 2015)。この性自認は一般的に、生物学的性と一致することが多いとされる。佐々木, 尾崎(2007)は、性自認をある性別に対する社会的役割や人格特性、意識的自己像という側面でのみ捉えず、ある性別に対するアイデンティティとして、ある性別に対する統一性、一貫性、持続性という側面が必要であることを論じている。

3. 社会的性役割

東, 鈴木(1991)は、性役割を、男女にそれぞれにふさわしいとみなされる行動やパーソナリティに関する社会的期待・規範、およびそれらに基づく行動であると定義している。社会生活を送るうえでの性役割を社会的性役割と呼ぶこともあり、針間(2016)はこれについて、通常は身体的性別、性自認と一致すると説明している。

4. 性的指向

性的志向とは、自分の性自認に対し、どのような性別の相手に恋愛感情や性的欲求を抱くかという方向性のことである(渡辺, 2015a)。土肥(1996)は、ジェンダー・アイデンティティの下位概念として「自己の性(sex と gender)の受容」「父母との同一化」とともに「異

性との親密性」を挙げており、異性選択への心理的な準備を行うこと等によってジェンダー・スキーマ(情報処理や認知段階において、「男性的」「女性的」であるというように性別化を行うこと)が見直され、ジェンダー・アイデンティティが確立するとしている。しかし、佐々木, 尾崎(2007)は、同性愛者では、同性に性的な魅力を感じながらも自己の性にもアイデンティティを持っており、ジェンダー・アイデンティティと性指向は異なる概念であると論じている。

5. エロティシズム・喜び・親密さ

セクシュアリティは、喜びと well being(良好な状態・幸福・安寧・福祉)の源であり、全体的な充足感と満足感に寄与するものである(World Association for sexual health, 2014)。

6. 生殖

生殖は、生殖能力(産める、産めない)の問題、生殖意思決定(産む、産まない)の問題に分けて考えることができる(針間, 2016)。1994 年に開催されたカイロ会議にて、リプロダクティブ・ヘルス/ライツ(性と生殖の健康と権利)の概念が提唱されて以来、性の健康や権利に関する観点から、セクシュアリティの一つとして生殖が注目されている。

II. 多様なセクシュアリティ

個々の人間の性別は出生時の性器の状態から決定されることが多いが、体・脳・心の様々な部分にそれぞれ異なる性別が一人の人間に認められることがあり、これが「性の多様性」と呼ばれる(魚橋, 2009)。多様なセクシュアリティの人々は「性的マイノリティ」に収束するのではなく、「多様性」の中には、身体の性に違和感を持たないシスジェンダーの同性愛者も含まれ、マジョリティの人々にも多様性は存在する(渡辺, 2015b)。

III. ジェンダーの発達

性別にまつわるさまざまな社会的定義がジェンダーであり、子どもがその影響を受けて社会化されていくことをジェンダー化と呼んでいる(青野, 金子, 2008)。

子どもは、2 歳くらいになると、自分自身と他者に、男性あるいは女性というように一貫して名づけはじめ、特定の行動や特性をジェンダーと結びつけるようになる(Golombok,

1997)。佐々木(2016)によると、性同一性(ジェンダー)は発達するものである。子どもは2歳くらいになると性別をラベリングできるようにはなるものの、表層的な認知発達段階にいたるため、何を持って自分の性別を捉えるかという恒常性が保てているわけではない。性別に対する認知発達が成熟し、思春期に入り、恋愛や性愛の感情などの発達に伴い、ジェンダー・アイデンティティの探求が本格化すると論じている。自分がどの性別に所属しているのかという感覚は、「物心ついたときに決まっている」のではなく、さまざまな遺伝的、環境的影響を受けて発達するものだとしている。

IV. 子どもを取り巻くジェンダー

子どもが生まれたときにまず発せられる問いかけは、「男の子か、女の子か」ということであり、人間の子どもの人生の1日目から、ジェンダー化された世界で生活している。子どもがジェンダーと行動を結び付けていく過程では、親、親以外の大人、同年代の子ども、マスメディア等が影響力を持っている(Golombok, 1997)。本研究では、子どもの生育に関わる保護者に焦点を当てて検討する。

1. 家庭

清水(2003)は、幼児の色彩選好を指標とし、子どもに対する親の色彩選択と合わせ、ジェンダー意識の調査を行った。その結果、色彩選好は子どもの性別によって決まることが明らかにされ、ピンク色と「女の子らしさ」を結びつける傾向が、親と幼児いずれにも見られた。このようなジェンダー・タイプ化された選好の概念枠組みには、幼児と親に関連が見られると論じている。坂口、宍戸、久保、後藤(2015)が看護学生に対して実施した調査から、ジェンダーを構成する因子と、父親イメージ、母親イメージが関連することがわかっている。ジェンダーの因子構造には、教育や社会のありようだけでなく、親の育児姿勢や人間性が関連することを示唆している。高校生とその両親を対象に行った調査(内田ら, 2006)では、保護者と子どもの性役割に対する態度が相関することが示されている。

向田(1998)は、偏見の強さを測定する独自の尺度を開発し、大学生とその親の偏見の強さを比較することにより、子どもの偏見に及ぼす親の影響について検討している。大学生は自分より親の持つ偏見が強いと捉え、子どもが認知する親の持つ偏見の程度は、実際に親自身が認知する偏見を上回るものであった。子どもの価値観が現実の親ではなく、認知された親と類似性が高いという結果から、偏見を含む価値観の形成には認知された親の

価値観がモデルとして同一視されていると考察している。

2. 保育・教育

教育は、当該文化の伝達と再生産の機能を持つことから、子どものジェンダー形成に大きな影響力を持っている(金子, 青野, 2004)。

三村, 力武(2006)は、保育者や保護者による保育、子育ての実践とジェンダー意識に焦点を当て、相関の調査を行った。保育園と家庭いずれにおいても「男女の本質的な違いを尊重」したうえでの「その子らしい」保育、子育て環境に置かれているという結果が出ている。そのもととなっているのが、ジェンダー・バイアスであると指摘し、保育士ならびに保護者は十分認識する必要があるとしている。

学校のカリキュラムには制度的・形式的な部分のほか、「さん」「くん」といった呼称や男女別の整列など、意図的でない見えない部分(隠れたカリキュラム)があり、子どもの人間形成に大きな影響を与えることがある(石倉, 1998; 村松, 2003)。石倉は、学校におけるジェンダー問題についても、隠れたカリキュラムがバイアスを生むメカニズムとして重要な役割を果たしているため、こうした文化の存在に気づくことが男女平等教育にとって重要であると述べている。

V. まとめ

生物学的性、性自認、性役割、性的指向など、マジョリティ、マイノリティの区別に関わらず、一人の人間に対してセクシュアリティの多様性が見られる。しかし、社会的・文化的な性であるジェンダーひとつをとっても、男女に二分される傾向があり、保護者や教育者、並びに子どもは、バイアスのかかった環境下で過ごしている可能性が示される。

また、ジェンダーは発達する過程で獲得するものであり、環境要因などのさまざまな影響を受けて確立されていくものである。その過程として、家庭や保育の場など、関わる保護者の意識も大きく影響することが示され、特にジェンダー・アイデンティティの確立していない発達段階に受ける影響は大きい。

VI. 用語の操作的定義

ジェンダー：社会的・文化的な性のこと(Judith, 1990)。

ジェンダー・バイアス：社会的・文化的性差に対する偏見・先入観(安川, 1998)。

多様なセクシュアリティ：「性の多様性」とほぼ同義であるが、本研究では、セクシュアリティの構成要素それぞれが多様であることを表現するための用語として用いる。

第3章 研究方法

I. 研究デザイン

本研究は、無記名自己記入式質問紙法を用いた横断的量的記述研究である。

II. 研究の対象

1. 研究対象施設

研究対象施設は、機縁法で選出した医療施設とした。

2. 研究対象者

研究の対象者は、医療施設(病院または助産所)の妊婦健診や母親学級に訪れた妊婦とした。

1)選択基準：18歳以上の妊娠している女性(出産歴、妊娠週数は問わない)

2)除外基準：身体的疾患、精神的疾患、社会的背景等により、質問紙への回答が女性の著しい負担になると医師あるいは助産師が判断した女性

3. 研究の対象人数

研究対象人数の算出は、必要な対象数が最大となる尺度の項目数を用いる方法とした。必要な対象者数を項目数の5から10倍(石井, 2007)とし、本研究で用いる中で最大となる15項目から、対象人数を75人から150人程度と想定した。回収率を約40%とし、200部を目標に配布した。

III. データ収集期間

データ収集期間は、2017年10月から12月までであった。

IV. 測定用具

本研究では、性役割に対する態度、トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度、多様なセクシュアリティに関する知識について測定した。

1. 性役割に対する態度：平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)

鈴木(1994)が作成した平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)を用いた。男女の性役割態度における平等志向性、あるいは伝統志向性のレベルを測定する評価尺度の短縮版である。性役割態度は、性役割に対して一貫して好意的もしくは非好意的に反応する学習した傾向、平等主義は、それぞれ個人としての男女の平等を信じることである(鈴木, 1991)。平等主義的性役割態度は結婚観、教育観、職業観の3因子からなる。回答はリッカート形式の5段階(最低1点から最高5点で、逆スコアリングも存在する)であり、合計得点を尺度得点(得点範囲は15点から75点)とした。この尺度では、高得点であれば性役割に対して平等志向的な態度を有し、低得点では伝統志向的な態度を有していることとみなした。

SEARA フルスケールの信頼性係数は $\alpha=0.93$ 、短縮版との相関係数は $r=0.94$ であり、短縮版そのものの信頼性係数は $\alpha=0.91$ と、信頼性が十分に高いことが示されている。また、男女差、教育レベル、女性の就労、年齢、結婚後の改姓に関する構成概念的妥当性が確認されている。

2. 多様なセクシュアリティに関する知識

中村(2016)が作成した多様なセクシュアリティに関する知識を問う質問を用いる。回答は、用語の認識に関しては「聞いたことがない」「聞いたことはあるが言葉の意味を知らない」「聞いたことがあり言葉の意味も知っている」の3項目で、それぞれ0点、1点、2点とし、高得点であるほど多様なセクシュアリティに関する用語の認識があることを示す。知識については、同性愛・両性愛・トランスジェンダー・LGBTそれぞれの定義等に関して問う質問10項目である。その回答は、「正しい」「正しくない」「わからない」の3項目で、正答を1点、誤答と「わからない」を0点とし、合計点数を算出した。高得点であるほど多様なセクシュアリティに関する知識の程度が高いことを示す。

3. トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度

Nagoshi et al. (2008)の Transphobia Scale を日本語訳した藤山ら(2014)の質問項目、Herek(1994)および Wright, Adams & Bernat(2010)の尺度を参考にして研究者が作成した。全10項目で構成し、回答は「全くそう思わない」「そう思わない」「どちらでもない」「そう思う」「とてもそう思う」の、リッカート形式の5段階である(最低1点から最高5

点で、逆スコアリングも存在する)。合計得点を尺度得点(得点範囲は5点から25点)とし、高得点であればトランスジェンダーやホモセクシュアル等の多様なセクシュアリティに対して否定的な態度であり、低得点であれば肯定的な態度であることを示す。

4. 子どもの性に関する自由記述

子どもの性に関して不安に感じていること、または出産後の子育ての際に不安に思うかもしれないと感じることを、自由に記述する項目を設けた。

5. 対象者の属性

対象者の年齢、妊娠週数、子どもの有無、婚姻状況、出産予定場所、多様なセクシュアリティに関して教育を受けた経験の有無、性別違和や LGBT などの多様なセクシュアリティの知り合いの有無を回答する項目を設けた。

V. 調査手順と方法

1. 調査対象施設に対して、研究依頼書(資料 1)と質問紙(資料 2)を用い、目的と意義を説明するとともに調査への協力を求めた。
2. 対象者に対して、研究者あるいは担当助産師、担当医師が医療施設の外来や母親学級等にて、研究依頼書(資料 3)と質問紙(資料 3)を用いて目的と意義を説明し、研究への協力を求めた。
3. 質問紙は、性役割に対する態度、多様なセクシュアリティに対する態度や知識を問う内容とした。表紙と裏表紙を含めて 6 ページである。
4. 質問紙は、研究者あるいは助産師への手渡し、医療施設の外来への収集箱設置のいずれかの方法で回収した。

VI. データの分析方法

得られたデータは、IBM SPSS Statistics 24 を用い分析し、有意水準は 5%とした。全ての変数について、記述統計あるいは度数分布を用いて基本統計量を算出した。この結果から、

属性と各得点でt検定あるいは一元配置分散分析、各得点間で相関分析を行い、属性・変数間の関連を探索することとした。また、自由記載の項目についてはカテゴリ化して記述した。

VII. 倫理的配慮

1. 研究方法に関する倫理的配慮

本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認(承認番号:17-A067)を得て実施した。多様なセクシュアリティに関する知識に関する質問紙、平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)は、尺度作成者より使用に関して承認を受けた。

2. 研究対象者に対する倫理的配慮

研究協力依頼書に、研究の目的・方法とともに、以下の内容で倫理的配慮を行うことを明記し、対象者が把握できるように説明した。研究に関して、開始前から最中、終了後に対象者が研究者に連絡をとれる連絡先を、文書に明記した。ジェンダーやセクシュアリティに関して悩みを持ったことのある(あるいは現在持っている)女性が不快な感情を覚えたり、将来の子どもの性に対して不安を抱えたりする可能性が推測されたため、依頼書と質問紙の冒頭に、質問紙の内容がジェンダーやセクシュアリティを中心とした質問や個人の認識を問うものであることを明記したうえで説明し、自由意志を尊重して協力を依頼した。

- 1) 研究への協力は自由意思であり、協力しない場合に不利益を被ることはない。無記名自己記入式質問紙のため、質問紙の返送後は同意の撤回はできない。
- 2) 質問紙の回答に際し、約 10 分程度の時間的拘束が生じる。また、回答中に協力を辞退したいと感じた場合には、回答を中止することができる。
- 3) 得られたデータに関し、プライバシーの保護や情報の匿名性の確保を徹底する。データは鍵のかかるロッカーに保管し、本研究のみに使用する。データは研究終了後 5 年間保存した後に処分する。
- 4) 聖路加国際大学大学院の課題研究としてまとめた後、学会や専門雑誌にて発表する予定である。

第4章 結果

病院1施設、助産所4施設の協力を得て、各施設の妊婦健診や母親学級に通う186名の女性に質問紙を配布した。いずれも関東の施設で、病院は、二次医療を提供する総合病院、助産所は、分娩を取り扱っている助産所であった。137名の回答(回収率73.6%)のうち、103名を有効回答とし、有効回答率は75.1%であった。

I. 対象者の特性

対象者の特性は、表1に示した。年齢は25歳から47歳であり、平均年齢は35.34歳($SD=4.47$)であった。妊娠週数は11週から39週で、妊娠初期5名(4.8%)、妊娠中期30名(29.1%)、妊娠後期58名(56.3%)であった。子どものいる人は53名(51.5%)で、現在第一子を妊娠中の女性は45名(43.7%)であった。婚姻状況は、未婚の女性が3名(2.9%)、既婚の女性が96名(93.2%)であった。出産予定場所は、病院が53名(51.5%)、診療所が1名(1.0%)、助産所が45名(43.7%)であった。

今までに性別違和やLGBTなどの多様なセクシュアリティについて学んだことがあるかどうかを尋ねたところ、「学んだことがある」と答えた女性は21名(20.4%)で、「学んだことがない」と答えた女性は61名(59.2%)、「覚えていない」と答えた女性は17名(16.5%)であった。複数回答を含め、女性が性別違和やLGBTなどについて学んだ場所として、「大学」11名、「小学校・中学校・高校のいずれか」9名、「職場」3名、「講演会」1名、「NGO」1名が挙げられた。身近な知り合いに、性別違和やLGBTなど多様なセクシュアリティの人がいるかという問いに対しては、「いる」と回答した女性が42名(40.7%)、「いない」と回答した女性が41名(39.8%)、「わからない」と回答した女性が16名(15.5%)であった。性別違和やLGBTの人が身近にいる最も多いケースとして、「友人」と答えた女性が25名(59.5%)、次いで「職場の同僚・先輩・後輩」が15名(35.7%)、「その他」8名(19.0%)という結果であった。その他には、「知人」、「学生時代の同級生や先輩」、「職場に面接を受けに来た人」「友人の友人」が挙げられた。

II. 性役割に対する態度

1. 各項目の回答

各項目に対する回答は、表2に示した。性役割に対して伝統的な態度を示す「とてもそ

う思う」または「そう思う」の割合が高かったものから順に、「経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい」(21.4%)、「女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をするのもそれと同じくらい重要である(逆転項目)」(18.4%)、「結婚後、妻は必ずしも夫の姓を名乗る必要はなく、旧姓で通してよい(逆転項目)」(16.5%)であった。

合計得点は、最低 37 点、最高 73 点であった。平均値は 57.28 点($SD=7.22$)であった。中央値は 57 点、最頻値は 54 点であった。

表 1 対象者の属性(N=103)

		<i>n</i>	(%)
年齢	20 歳代	8	(7.8)
	30 歳代	74	(71.8)
	40 歳代	14	(13.6)
	未記入	7	(6.8)
週数	初期	5	(4.9)
	中期	30	(29.1)
	後期	58	(56.3)
	未記入	10	(9.7)
子どもの有無	いる	53	(51.5)
	いない(第一子妊娠中)	45	(43.7)
	未記入	5	(4.9)
婚姻	未婚	3	(2.9)
	既婚	96	(93.2)
	未記入	4	(3.9)
出産予定場所	病院	53	(51.5)
	診療所・クリニック	1	(1.0)
	助産院	45	(43.7)
	未記入	4	(3.9)
教育機関での多様なセクシュアリティに関する学習の機会	ある	21	(20.4)
	ない	61	(59.2)
	覚えていない	17	(16.5)
	未記入	4	(3.9)
多様なセクシュアリティの身近な知り合い	いない	41	(39.8)
	わからない	16	(15.5)
	いる*	42	(40.7)
	家族	0	
	親戚	0	
	友人	25	
	職場の後輩・同僚・先輩	15	
	その他	8	
	未記入	4	(3.9)

*「多様なセクシュアリティの身近な知り合い」については複数回答

2. 性役割に対する態度の得点と関連項目

1) 年齢

年齢層ごとの平均得点は20-29歳 61.88点($SD=6.62$)、30-39歳 57.12点($SD=7.26$)、40-49歳 57.86点($SD=6.84$)であった。20-29歳のグループは他の年齢層に比べて平均点が高かった。年齢層と性役割に対する態度の関連を検討するため、分散分析を行った。その結果、年齢層によって性役割に対する態度の有意な差はなかった($F=1.599, p=0.208$)。

2) 出産歴(子どもの有無)

経産婦の平均得点は 57.30 点($SD=6.97$)、初産婦が 57.71 点($SD=7.75$)であった。等分散を仮定した t 検定の結果、出産歴によって性役割に対する態度の有意な差はなかった($F=0.275, p=0.784$)。

3) 婚姻状況

未婚の女性の平均得点は 66.00 点($SD=2.00$)、既婚の女性の平均得点は 57.17 点($SD=7.23$)であった。

4) 教育の有無

LGBT や性別違和などの多様なセクシュアリティに関して教育を受ける機会があった女性の平均得点は 58.52 点($SD=6.86$)、教育を受ける機会がなかった女性の平均得点は 57.13 点($SD=6.84$)であった。等分散を仮定した t 検定の結果、教育の有無によって性役割に対する態度の有意な差はなかった($F=0.00, p=0.424$)。

5) 多様なセクシュアリティの身近な知り合い

LGBT や性別違和などの多様なセクシュアリティの身近な知り合いが、「いない」あるいは「わからない」と回答した女性の平均得点は 56.55 点($SD=7.35$)、「友人」「職場の後輩・同僚・職場」「その他」に「いる」と回答した女性の平均得点は 58.60 点($SD=7.21$)であった。等分散を仮定した t 検定の結果、多様なセクシュアリティの身近な知り合いの有無によって、性役割に対する態度の有意な差はなかった($F=0.047, p=0.174$)。

表 2 性役割に対する態度 N=103(%)

	全くそう 思わない	そう 思わない	どちら でもない	そう 思う	とても そう 思う	未回答
女性が社会的地位や賃金の高い職業を持つと結婚するのがむずかしくなるから、そういう職業を持たないほうがよい	62 (60.2)	30 (29.1)	9 (8.7)	2 (1.9)	0	0
結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである	67 (65.0)	19 (18.4)	12 (11.7)	4 (3.9)	0	1 (1.0)
主婦が働くとき夫をないがしろにしがちで、夫婦関係にひびがはいりやすい	48 (46.6)	37 (35.9)	14 (13.6)	4 (3.9)	0	0
女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である	57 (55.3)	29 (28.2)	13 (12.6)	4 (3.9)	0	0
主婦が仕事を持つと、家族の負担が重くなるのでよくない	46 (44.7)	36 (35.0)	14 (13.6)	7 (6.8)	0	0
結婚後、妻は必ずしも夫の姓を名乗る必要はなく、旧姓で通してよい*	3 (2.9)	14 (13.6)	37 (35.9)	38 (36.9)	11 (10.7)	0
家事は男女の共同作業となるべきである*	3 (2.9)	1 (1.0)	16 (15.5)	42 (40.8)	41 (39.8)	0
子育ては女性にとって一番大切なキャリアである	10 (9.7)	18 (17.5)	48 (46.6)	23 (22.3)	4 (3.9)	0
男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることが非常に大切である	21 (20.4)	31 (30.1)	40 (38.8)	9 (8.7)	2 (1.9)	0
娘は将来主婦に、息子は職業人になることを想定して育てるべきである	57 (55.3)	30 (29.1)	12 (11.7)	4 (3.9)	0	0
女性は、家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いたほうがよい	34 (33.0)	30 (29.1)	25 (24.3)	13 (12.6)	1 (1.0)	0
女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をするのもそれと同じくらい重要である*	6 (5.8)	13 (12.6)	31 (30.1)	42 (40.8)	11 (10.7)	0
女性は子どもが生まれても、仕事を続けたほうがよい*	5 (4.9)	7 (6.8)	63 (61.2)	23 (22.3)	5 (4.9)	0
経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい	8 (7.8)	32 (31.1)	41 (39.8)	17 (16.5)	5 (4.9)	0
家事や育児をしなければならないから、女性はあまり責任の重い、競争の激しい仕事をしないほうがよい	18 (17.5)	37 (35.9)	32 (31.1)	14 (13.6)	2 (1.9)	0

*逆転項目

Ⅲ. トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度

1. 尺度の信頼性

問 4 の全 10 項目を用い、尺度の信頼性を分析した。Chronbach の α 係数は 0.782 であった。

2. 各項目の回答

各項目に対する回答は、表 3 に示した。トランスジェンダーやホモセクシュアルに対して否定的な態度を示す「とてもそう思う」または「そう思う」の割合が高かった項目は、順に「前から知っている人に『昔は別の性別だった』と打ち明けられたら、うろたえてしまう」(35.0%)、「同性愛も、性的指向のひとつとして受け入れられる(逆転項目)」(16.6%)、「誰かに会ったとき、その人が男性か女性かはっきりわかることは、重要なことだ」(15.6%)、「男性か女性かわからない人に街中で会ったら、その人を避けてしまう」(13.6%)であった。

全 10 項目の合計得点を算出した。最低 10 点、最高 34 点であった。平均値は 22.47 点 ($SD=5.35$)であった。中央値は 23 点、最頻値は 20 点であった。

3. トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度得点と関連項目

1) 年齢

年齢層ごとの平均得点は 20-29 歳 19.63 点($SD=6.25$)、30-39 歳 22.28 点($SD=5.18$)、40-49 歳 23.14 点($SD=6.03$)であった。20-29 歳代の平均得点が他の年齢層より低かった。年齢層によってトランスジェンダーやホモセクシュアルに対する態度に有意な差はなかった($F=1.134, p=0.326$)。

2) 出産歴

平均得点は、経産婦が 22.77 点($SD=5.56$)、初産婦が 21.62 点($SD=5.11$)であった。出産歴によって、トランスジェンダーやホモセクシュアルに対する態度に有意な差はなかった($F=0.590, p=0.292$)。

3) 婚姻状況

未婚の女性の平均得点は 17.67 点($SD=6.80$)、既婚の女性の平均得点は 22.46 点 ($SD=5.31$)であった。

4) 教育の有無

LGBT や性別違和などの多様なセクシュアリティに関して教育を受ける機会があった女性の平均得点は 22.05 点($SD=4.71$)、教育を受ける機会がなかった女性の平均得点は 22.39 点($SD=5.50$)であった。教育の有無によってトランスジェンダーやホモセクシュアルに対する態度に有意な差はなかった($F=1.061$, $p=0.798$)。

5) 多様なセクシュアリティの身近な知り合い

LGBT や性別違和などの多様なセクシュアリティの身近な知り合いが、「いない」あるいは「わからない」と回答した女性の平均得点は 23.39 点($SD=5.03$)、「友人」「職場の後輩・同僚・職場」「その他」に「いる」と回答した女性の平均得点は 20.81 点($SD=5.59$)であった。多様なセクシュアリティの身近な知り合いを持つ女性は、トランスジェンダーやホモセクシュアルに対する態度得点が有意に低かった($F=0.022$, $p=0.018$)。

表 3 トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度 $n=103(\%)$

	全くそう 思わない	そう思わない	どちらでも ない	そう思う	とてもそう思う	未回答
男性でも女性でもないという人は、どこがおかしいと思う	43 (41.7)	38 (36.9)	14 (13.6)	8 (7.8)	0	0
前から知っている人に「昔は別の性別だった」と打ち明けられたら、うろたえてしまう	18 (17.5)	22 (21.4)	27 (26.2)	35 (34.0)	1 (1.0)	0
男性か女性かわからない人に街中で会ったら、その人を避けてしまう	23 (22.3)	39 (37.9)	27 (26.2)	14 (13.6)	0	0
誰かに会ったとき、その人が男性か女性かはっきりわかることは、重要なことだ	15 (14.6)	31 (30.1)	41 (39.8)	15 (14.6)	1 (1.0)	0
人間は性別を変えることはできない	17 (16.5)	52 (50.5)	29 (28.2)	4 (3.9)	0	1 (1.0)
同性愛者に対してあまり良い思いを抱かない	23 (22.3)	48 (46.6)	27 (26.2)	5 (4.9)	0	0
同性愛も性的指向のひとつとして受け入れられる*	5 (4.9)	12 (11.7)	28 (27.2)	43 (41.7)	15 (14.6)	0
同性の性的な行為は道徳的に良くないことである	30 (29.1)	42 (40.8)	29 (28.2)	1 (1.0)	1 (1.0)	0
同性愛者の結婚が法律で認められても良いと思う*	3 (2.9)	6 (5.8)	20 (19.4)	51 (49.5)	23 (22.3)	0
同性愛は、単に異なるライフスタイルであって非難されるべきではない*	1 (1.0)	4 (3.9)	11 (10.7)	53 (51.5)	34 (33.0)	0

*逆転項目

IV. 多様なセクシュアリティに関する用語の知識

1. 各項目の回答

各項目の回答は図 1 に示した。全項目において「聞いたことがあり言葉の意味も知っている」の回答が、「聞いたことがない」「聞いたことはあるが言葉の意味を知らない」の回答を上回った。「聞いたことがない」という回答がもっとも多かった用語は順に、「LGBT」(31.1%)、「両性愛」(20.4%)、「トランスジェンダー」(8.7%)であった。

合計得点は、最低 9 点、最大 18 点であった。平均値は 15.62 点($SD=2.25$)であった。中央値は 16 点、最頻値は 18 点であった。

2. 多様なセクシュアリティに関する用語の知識得点と関連項目

1) 年齢

年齢層ごとの平均得点は、20-29 歳 16.13 点($SD=2.16$)、30-39 歳 15.50 点($SD=2.44$)、40-49 歳 16.43 点($SD=0.75$)であった。年齢層による有意な知識の差はなかった($F=1.158$, $p=0.319$)。

2) 出産歴 (子どもの有無)

経産婦の平均得点は 15.55 点($SD=2.18$)、初産婦の平均得点は 15.82 点($SD=2.41$)であった。出産歴によって有意な知識の差はなかった($F=0.555$, $p=0.555$)。

3) 婚姻状況

未婚の女性の平均得点は 16.67 点($SD=2.30$)、既婚の女性の平均得点は 15.61 点($SD=2.29$)であった。

4) 教育の有無

LGBT や性別違和などの多様なセクシュアリティに関して教育を受ける機会があった女性の平均得点は 16.52 点($SD=2.27$)、教育を受ける機会がなかった女性の平均得点は 15.54 点($SD=2.03$)で、教育を受ける機会があった女性の平均得点が高かった。教育の機会の有無によって、用語の知識に有意な差はなかった($F=0.014$, $p=0.068$)。

5) 多様なセクシュアリティの身近な知り合い

LGBT や性別違和などの多様なセクシュアリティの身近な知り合いが、「いない」あるいは「わからない」と回答した女性の平均得点は、15.59 点($SD=2.12$)、「友人」「職場の後輩・同僚・職場」「その他」に「いる」と回答した女性の平均得点は 15.81 点($SD=2.47$)であった。多様なセクシュアリティの身近な知り合いの有無によって、多様

なセクシュアリティに関する用語の知識に有意な差はなかった($F=1.310$, $p=0.637$)。

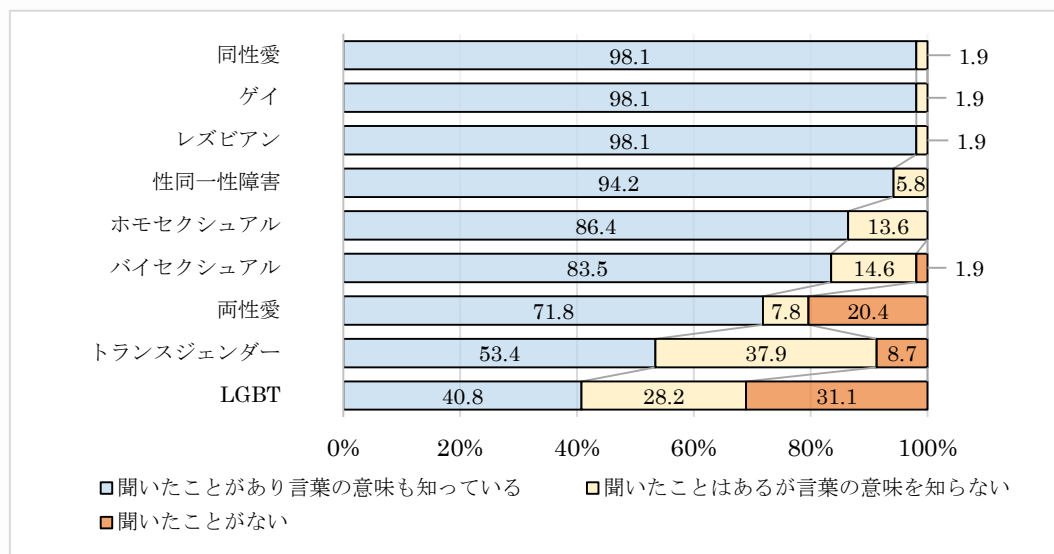


図1 多様なセクシュアリティに関する用語の知識($n=103$)

V. 多様なセクシュアリティに関する知識

1. 各項目の回答

正答率が高かった項目は、順に、「自分の身体的な性別とは異なる性別で生きたいと願う人がある」(97.1%)、「バイセクシュアルは、2人の男性を同時に愛する人を指す」(82.5%)、「同性愛は、精神障害ではない」(74.8%)、「日本の法律では、同性のカップルは結婚できない」(70.9%)であった。「わからない」を含む誤答の割合が多かった項目は順に、「日本では、同性愛者や両性愛者、性同一性障害やLGBTなどの人々の割合は、100人に1人である(92.2%)」、「LGBTとは、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアルの人を指す(68.9%)」、「同性愛者や両性愛者、性同一性障害やLGBTなどの人々を象徴する色は、白色である(66.0%)」、「トランスジェンダーの人は、全て性同一性障害と診断される(62.3%)」、「日本では、性同一性障害の人は無条件で戸籍上の性別変更ができる(54.4%)」、といった、性同一性障害の診断や、多様なセクシュアリティの人々の割合等、5項目であった。

知識の合計得点は、最低0点、最高10点であった。平均値は5.20点($SD=2.07$)であった。中央値は5点、最頻値は6点であった。

2. 多様なセクシュアリティに関する知識得点と関連項目

1) 年齢

年齢層ごとの平均得点は、20-29 歳 5.50 点($SD=2.72$)、30-39 歳 5.20 点($SD=2.17$)、40-49 歳 5.21 点($SD=1.42$)であった。年齢層による知識の有意な差はなかった($F=0.700$, $p=0.932$)。

2) 出産歴 (子どもの有無)

経産婦の平均得点は 4.94 点($SD=1.93$)、初産婦の平均得点は 5.60 点($SD=2.33$)であった。出産歴によって知識の有意な差はなかった($F=3.372$, $p=0.131$)。

3) 婚姻状況

未婚の女性の平均得点は 6.00 点($SD=1.00$)、既婚の女性の平均得点は 5.22 点($SD=2.15$)であった。

4) 教育の有無

LGBT や性別違和などの多様なセクシュアリティに関して教育を受ける機会があった女性の平均得点は 6.00 点($SD=1.70$)、教育を受ける機会がなかった女性の平均得点は 4.98 点($SD=2.10$)であった。教育を受けたことがある女性のほうが、多様なセクシュアリティに関する知識の得点が有意に高かった($F=1.118$, $p=0.049$)。

5) 多様なセクシュアリティの身近な知り合い

LGBT や性別違和などの多様なセクシュアリティの身近な知り合いが、「いない」あるいは「わからない」と回答した女性の平均得点は 4.88 点($SD=1.96$)、「友人」「職場の後輩・同僚・先輩」「その他」に「いる」と回答した女性の平均得点は 5.83 点($SD=2.16$)であった。多様なセクシュアリティの身近な知り合いを持つ女性のほうが、多様なセクシュアリティに関する知識の得点が有意に高かった($F=0.641$, $p=0.024$)。

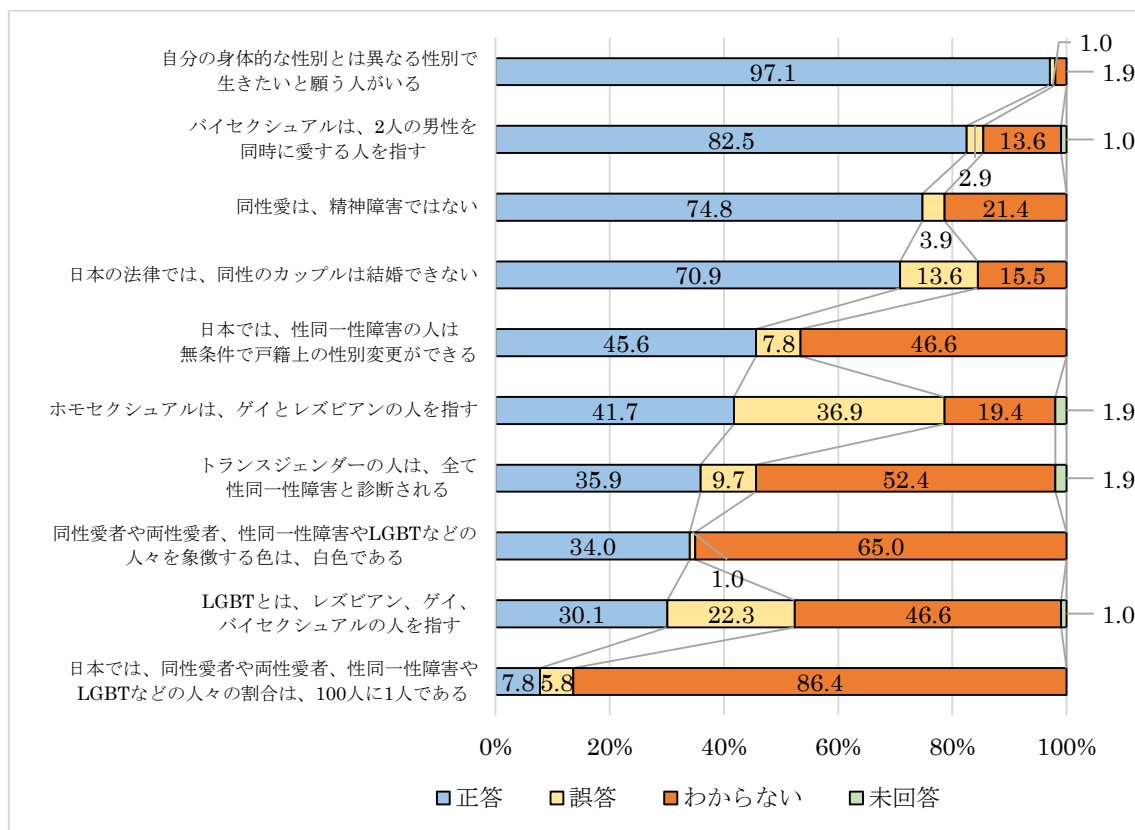


図2 多様なセクシュアリティに関する知識

VI. 多様なセクシュアリティに関する態度や知識の関連要因

1. 性役割に対する態度と関連要因

性役割に対する態度得点と、多様なセクシュアリティに関する用語の知識得点の相関分析を実施した。その結果、Pearson の相関係数が 0.160 であったため、ほとんど相関がなかった($p=0.105$)。

性役割に対する態度得点と、多様なセクシュアリティに関する知識得点の相関分析を実施した。その結果、Pearson の相関係数が 0.324 であったため、やや弱い相関ではあるものの、多様なセクシュアリティに関する知識がある人は性役割に対する態度が平等志向の傾向にあった($p=0.001$)。

性役割に対する態度得点と、トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度得点の相関分析を実施した。その結果、Pearson の相関係数が-0.314 であったため、やや弱い負の相関があった。性役割に対する態度得点が高い女性はトランスジェンダーやホモセクシュアルに対する態度得点が高い傾向にあり、性役割に対する態度が平等志向である

女性は、トランスジェンダーやホモセクシュアルに対する態度が肯定的な傾向にあった($p=0.001$)。

2. トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度

多様なセクシュアリティに関する用語の知識得点と、トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度得点の相関分析を実施した。その結果、Pearson の相関係数が-0.233 で、やや弱い負の相関があった。用語の知識がある女性は、トランスジェンダーやホモセクシュアルに対する態度が肯定的な傾向にあった($p=0.018$)。

多様なセクシュアリティに関する知識得点と、トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度得点の相関分析を実施した。その結果、Pearson の相関係数が-0.270 で、やや弱い負の相関があった。多様なセクシュアリティの知識がある女性は、トランスジェンダーやホモセクシュアルに対する態度が肯定的な傾向にあった($p=0.006$)。

3. 用語の知識と多様なセクシュアリティに関する知識の関連

多様なセクシュアリティに関する用語の知識得点と、多様なセクシュアリティに関する知識得点で相関分析を実施した。Pearson の相関係数は 0.573 で、やや強い正の相関が見られた。用語の知識がある女性は、多様なセクシュアリティに関する知識がある傾向にあった($p<0.000$)。

VII. 子どもの性に関する自由記述

有効回答 103 名中 36 名が、子どもの性に関して記述した。子どもの性に関して困っていることや不安を感じていることに焦点を当て、内容によって 7 カテゴリーに分類し、表 4 に示した。「(子どもが性的マイノリティであった場合の)認めたい気持ちと “普通” でいてほしい気持ちのジレンマ」「日本の社会での生きづらさ」「社会的には性の多様性を受け入れられるが、自分の子どものこととなると不安」「性教育の実施に関する不安」「子どもの性に関する支援方法についての不安」「親の性役割に対する態度が子育てに及ぼす影響」と、その他である。

表 4 子どもの性に関して困っていることや不安に感じていること(自由記述)

(子どもが性的マイノリティであった場合の)認めたい気持ちと、“普通”でいてほしい気持ちのジレンマ	<ul style="list-style-type: none"> ・多様性は認めてあげたいが、普通でいてほしい ・差別しないという気持ちが大きいが、子どもには違ってほしいと思う自分がある
日本の社会での生きづらさ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本では性の多様性に対する理解が遅れているから、住みにくいと思う ・社会や学校でいじめにあうのではないかと心配
社会的には性の多様性を受け入れられるが、自分の子どものこととなると不安	<ul style="list-style-type: none"> ・周りの人の性の多様性は受け入れられるが、自分の子どものことだと、どう接するか不安 ・社会的に性同一性障害などへの抵抗はないが、自分の子どもがそうになったら困惑してしまうのではないと思う ・我が子が同性愛者の場合、頭では同性愛が悪いことではないとわかっているものの、親として受け入れられるのかと考えさせられる
性教育の実施に関する不安	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が育った世代、教えられた価値観と現状が違うなかで、男女間の性教育についてどう教えるか課題に感じる ・自分の時は学校任せで親からは特になかったので、子どもが思春期になった時の性教育について不安 ・性に対して「生きること」とつながるプラスのイメージを持ってほしいが、性の情報や人を傷つけるような迷信があふれているため、心配
子どもの性に関する支援方法についての不安	<ul style="list-style-type: none"> ・心身の性の問題に、子どもと過ごしながら気づけるか、子どもから相談されるような環境や関係を作っておけるか ・もし自分の子供が性同一性障害であれば、どう接することで自己肯定感が育まれ、自分らしく生活できるか知りたいと思う ・性とか関係なくその子の個性を生かせるように関わり、その子の選んだ道に寄り添えれば良いが、実際できるかは自信がない ・子どもから戸籍上の性別と不一致の性を打ち明けられたとき、何と言えいいか考えることがある
親の性役割に対する態度が子育てに及ぼす影響	<ul style="list-style-type: none"> ・男らしさ、女らしさを意識した子育てを“しなければならない”という概念のしがらみがあるかもしれない ・自分は『男の子だから・女の子だから』という言葉を使わずに育てたいが、周囲の人や夫が使うと思うので、それが気になる ・男女意識を押しつけないようにしようとは思いつつ、男らしさ女らしさを求めてしまう
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の子どもが性に関する問題を抱えるような状況に、実際に置かれてみないとわからないというのが正直な気持ち ・正直なところ、子どもの LGBT の可能性については想定していない ・今のところ子どもの性に関する不安などはないが、実際に性同一性障害になったらイヤ

第5章 考察

I. 母親となる女性が受けた教育

性別違和や LGBT などの多様なセクシュアリティに関して教育を受けたことがある女性は、全体の 21.8%で、5 人に 1 人であるという結果が出た。就労女性を対象とした斉藤、末原(2007)の研究では避妊や性感染症について性教育を受けた女性が 83.4%、保育者を対象とした及川(2001)の研究では性教育を受けた保育者が 89.0%の割合で存在する。生殖や感染症に関する性教育と比べると、多様なセクシュアリティに関する教育は普及しているとは言い難い。

中村(2016)の研究では、看護職者のうち 20.6%が教育機関での多様なセクシュアリティに関する学習をしたことがあると回答しており、本研究と同様の結果となっている。しかし、そのうち、看護教育以外で多様なセクシュアリティについて学んだ者は 4 割以下にとどまっていることから、本研究における女性は、多様なセクシュアリティについて教育を受けた割合としては高いと言える。考えられる要因としては、質問紙へ回答した母親となる女性の年代は、理科や保健を中心に性に関する指導が取り入れられた 1992 年以降に教育を受けている割合が高いことである。また、それ以降、1994 年には『生徒の問題行動に関する基礎資料—中学校・高等学校編—』(文部省)で、「倒錯型性非行」とされていた同性愛の記述が削除されたり、2000 年以降はジェンダー・フリー(ジェンダー・バイアスをなくすこと)教育の実践もされるようになったりするなど、日本の性教育の変遷の中で、多様なセクシュアリティやジェンダーに関する教育を受ける機会があったと考えられる。本研究では、限定された対象ではあるものの、看護などに関わらない一般の人々の約 2 割が、多様なセクシュアリティに関する教育を受けていることが明らかになった。

II. 性役割に対する態度と関連する因子

1. 性役割に対する態度

性役割に対する態度は、中村(2016)が行った看護職者対象の質問紙による平均 57.44 点、鈴木(1996a)が行った就労女性対象の質問紙による平均 56.67 点と、本研究の 57.28 点はほぼ同様の結果であった。

日本国内の性役割に関する歴史的変遷を見ると、1986 年に施行された男女雇用機会均等法をはじめとし、男女共同参画社会の実現を 21 世紀の最重要課題と位置付けた男女共

同参画社会基本法が 1999 年に施行されるなど、国として男女平等の実現に向けた取り組みがなされている。内閣府男女共同参画局は、「男女の人権の尊重」や「家庭生活における活動と他の活動の両立」、「社会における制度又は慣行についての配慮」など、男女の差別をなくし、固定的な役割分担意識にとらわれずに男女が様々な活動ができるような基本理念を掲げている。この頃よりジェンダー・フリー、男女共同参画志向の動きが盛んとなったが、先の研究(鈴木,1996a)と本研究の性役割に対する態度に大きな相違は見られない。本研究ではごく限定された対象者への調査ではあるものの、20 年間で性役割に対する態度が変化していない可能性があることを示唆する結果となった。

2. 性役割に対する態度に関連する因子

鈴木(1994)の研究では、教育レベルが高いほど、平等志向性が高くなることが示されている。本研究では、多様なセクシュアリティに関する知識得点が高い女性は、性役割に対する態度が平等志向的な傾向にあった。多様なセクシュアリティに関する知識得点が高い女性は、教育機関にて学習した経験があり、その半数が大学であった。多様なセクシュアリティに関して学ぶ機会は、半数が大学といった高等教育にある一方、義務教育や職場の研修、講演会などの場合もあり、そこで得た知識が性役割に対する平等志向性に関連する可能性が示された。

先の研究では、有職女性、同一企業での就労継続、管理職への就労は平等志向性を高めること(鈴木, 1996a)、男性よりも女性のほうが平等志向的な傾向にあること(鈴木, 1994; 佐野, 高田谷, 近藤, 2007; 藤山ら, 2014)等、性役割に対する態度と関連する因子が明らかになっている。本研究では、性役割に対する態度の平等志向性が高い女性は、多様なセクシュアリティに関する知識がある女性であることが示された。

また、性役割に対する態度が平等志向的である女性は、トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度も肯定的な傾向にあった。法務省人権擁護局(2002)が定めた「人権教育・啓発に関する基本計画」において、性的指向や性同一性障害などの「性の多様性」に対する理解が人権課題として挙げられており、このことから田代, 渡辺, 良(2014)は、男女の対立を乗り越え、硬直的な男女の二分法の枠組みに当てはまらない人々の人権を侵害しない視点がもたらされたと考察している。男女の性役割に対する態度は、性の多様性への理解と関連している可能性があると考えられる。

Ⅲ. トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度に関連する因子

多様なセクシュアリティに関する用語の知識、また多様なセクシュアリティに関する知識のある女性、多様なセクシュアリティの知り合いが身近にいる女性が、トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度が肯定的である傾向が見られた。性役割に対する態度とは異なり、トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度においては、用語の知識のみがある場合でも、態度が肯定的となる傾向にあった。

トランスフォビア(性同一性障害やトランスジェンダーに対する嫌悪)について調査された研究(中村,2016)では、多様なセクシュアリティに関して教育を受けた経験があること、多様なセクシュアリティに関する知識を持っていること、多様なセクシュアリティの身近な知り合いがいることが、性別違和やトランスジェンダーへの嫌悪を軽減する要因となっている。正しい知識や情報を提供する教育の機会をつくることや、多様なセクシュアリティの人々を身近に感じる事が、多様なセクシュアリティの人々への態度を変容する要因となる可能性が考えられる。

池上(2014)によると、偏見や差別は、防衛機制のひとつであり、また、常に何らかの集団に属する人間が生存競争を勝ち抜くための適応的な心理機制の反映である可能性に言及している。精神障害者に対する偏見をテーマに行われた研究(山口, 三野, 2007)では、精神保健福祉全般に関する授業と当事者の語りを介入とし、高校生の持つ偏見を減少させる効果を検討した。その結果、介入群において好ましい態度変容が見られたが、時間の経過に伴い効果は減少した。自身の属する集団に、偏見を持つ対象となる他集団との接触を持つ者がいること(Wright, McLaughlin-Volpe&Ropp, 1997)や、異性愛者と同性愛者間の関わりを描いたテレビ番組を視聴することによっても、対象への偏見が減少するという研究もある(Schiappa, Gregg&Hewes, 2005)。

以上のことから、正しい理解を促す継続的な教育、多様なセクシュアリティの人々との直接あるいは間接的な接触を通して偏見や差別の緩和に働きかけることが、多様なセクシュアリティの受容を支援する手段として検討できる。

Ⅳ. 多様なセクシュアリティに関する知識

用語の知識のある女性は、多様なセクシュアリティに関する知識得点も高かった。しかし、多様なセクシュアリティに関する定義や診断などを知っている場合と比べると、性役割に対する態度やトランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度との関連は低い傾向に

あった。また、多様なセクシュアリティに関して教育を受けた経験の有無では用語の知識得点には有意差がなかった一方、教育を受けた女性は受けていない女性に比べ、多様なセクシュアリティに関する定義や診断などの知識得点が高かった。このことから、正しい知識を得るためには、多様なセクシュアリティに関して教育を受けていることが必要であり、正しい知識によって性役割に対する態度は平等志向的に、トランスジェンダーやホモセクシュアルに対する態度が肯定的に変化する可能性があるとし唆された。

増田、今村(2005)の調査によると、学校で行われる性教育は、男女の身体の違いや第二次性徴など、生物学的な側面からの性に関する項目が上位を占めたことが示された。学習指導要領でも、体の発育・発達について理解できることや、思春期の心身の変化、生殖機能、感染症の予防、異性への関心や異性の尊重などの内容を、小学校・中学校・高等学校の性教育として定めており、学校における性に関する教育内容に、多様なセクシュアリティについて扱う表記は見られなかった。日高(2015)の、保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校に所属する教員を対象に行った調査によると、LGBT について授業で取り扱う必要があると認識している教員は、6 割以上であった。一方で、同調査では「LGBT について授業に取り入れた経験がある」のは全体の 13.7%に留まっていた。その理由として「教える必要性を感じる機会がなかった」「同性愛や性同一性障害についてよく知らない」などが挙げられた。多様なセクシュアリティに関してメディア等で報じられることに伴い用語などは耳にする反面、正しい理解を促す教育の実践は十分でない可能性が示唆された。

福島(2009)の報告では、大学や高等看護学院などの学生が、自主企画にて性の健康とセクシュアリティに関するイベントを実施した。性的マイノリティの人と企画代表者の対談や、医師による性の健康課題の講演等の内容で、保健医療従事者や一般成人などを含む参加者の 9 割以上が「大変学びになった」と回答があり、性教育や多様なセクシュアリティに関してエンパワメントされた結果となった。以上のことから、学校教育に多様なセクシュアリティに関する内容を取り入れる必要性、教育を受ける機会の少ない成人に対して、イベントなどで性の健康について考える機会を提供する必要性が示されたと考える。

V. 母親となる女性が子どもの性に関して抱える不安

1. 子どもの性の多様性を受容できるかという不安

「社会的な抵抗はないが、自分の子どものこととなった際に、親として受け入れられるのか」という不安が挙げられた。石丸(2002)によると、性的マイノリティがマジョリティに

対して持つ差異はプライベートな領域に存在し、社会的にもタブー性を持つため、家族からのサポートも得られにくい。一方で、石丸(2004)がLGBを対象に、自尊心維持について調査を行ったところ、他者からの受容が自尊心に対して及ぼす影響は、異性愛者よりも同性愛者及び両性愛者のほうが大きいとしている。このことから、サポートは得られにくい一方、他者からの受容は多様なセクシュアリティを持つ人々にとって重要なものであると言える。

幼児を持つ保護者を対象とした研究(森屋, 石橋, 和田, 2012)では、フォーカス・グループ・ディスカッションにおいて、参加者である保護者らが「人の多様性」について話し合った。その結果、「人の多様性」を肯定することを理想としながらも、子どもへの期待や障害の差別といった、多様性の受容を阻む要因が見られた。遺伝学では、健常者と当事者を二極化して捉えることがなく、保因者という概念を知ることが、学習者の「人の多様性」に関して発想を転換させるきっかけとなりうると述べている。福島(2015)は、WHO 欧州地区事務局とドイツの健康教育局(2010)が発行した「欧州におけるセクシュアリティ教育の標準」の理念とねらいを挙げ、これが自他尊重と性や価値観の多様性尊重であることや、人権・セクシュアリティに対して肯定的なアプローチを基礎に置いていることについて言及している。このことから、性の多様性のみでなく、自他尊重や人権に焦点を当てた教育においても、多様なセクシュアリティの尊重を促すことにつながると考えられる。

2. 性教育の実施や子どもの性に関する支援方法についての不安

小中学校生の子どもの持つ保護者を対象とした性教育に関する調査(岡崎, 2014)では、保護者が性教育を実施していない理由として、家庭で行うことではないと思っていることや知識不足、教え方がわからず気まずさを感じていることなどの理由が挙げられている。本研究においても、「自分が育った世代との違い」や「自分の時は学校任せで親からは(性教育を受けることが)なかった」などの理由で性に関する教育の実施に不安を抱いていた。

中学生とその保護者、教師を対象に実施した鈴木, 佐々木, 片山, 前田(2005)の質問紙調査では、子どもの性に関する悩みがある場合「相談相手がいる」と回答した保護者は、子どもの性に関する悩みがある保護者のうち 81.3%であった。その内訳を見ると、夫や家族、親、友人、教師であり、教育の専門職である教師を示すものは 5%に過ぎず、その他医療者などを挙げるものはいなかった。亀石, 下見(2017)の研究における「家庭で子どもに性教育を行う際の適切な表現方法を教えてほしい」「家庭で性教育を行う保護者の相談

に乗ってほしい」という回答から、保護者が助産師や保健師などの専門職に求める支援が明らかになった。女性の抱える不安を軽減する手段として、性や健康に関わる医療専門職者の介入も手段のひとつとして検討できる。また、及川(2001)の報告では、自身が教師と母親から性教育を受けた経験を持つ保育者が、性教育に対して肯定的な考えを示す傾向があり、家庭での性教育の実践には、保護者が性教育を受けた経験を持っていることが必要であると考えられる。

3. 親の性役割に対する態度が子育てに及ぼす影響

『男の子だから、女の子だから』という言葉を使わずに育てたい」という意識の一方で、「周囲の人が使うと思うから、それが気になる」「男らしさや女らしさを求めてしまう」といった、女性自身や周囲の人の固定観念が行動に表れ、ジェンダー化した関わりを子どもに持ってしまうことを懸念していた。

青野(2007)は、子どもの認知の発達から、子どもをとりまく家庭環境や身近な人間関係が、子どものジェンダー化の重要な担い手であるとしている。森永(2001)は、子どもが世界を理解するときの一つの手がかりとして「性別」を挙げ、発達に応じて「男か女か」というものの見方が複雑化していく、と言及している。性別は個人にとっての「自分らしさ」の大切な一部であり、家庭では保護者自らのジェンダー観を振り返りながら、ジェンダー・フリーの環境で子どもを育てることの重要性を示している。

石倉(1998)は、ジェンダー・フリー教育に向け、子ども自身、教師、保護者の考えの中にあるジェンダー・バイアスに気づくことが必要であり、生活や人間関係の中に何気なく組み込まれているジェンダーを見直すためにバイアスの度合いをチェックすることを勧めている。三村, 力武(2007)も、保育・子育て環境におけるジェンダーへの気づきを促すことが個を尊重した保育・子育て環境の形成につながるとし、保育・子育て実践に関するジェンダー・バイアスへの「気づきプログラム」を作成した。保育士間のグループディスカッションを通し、日常に存在するジェンダー・バイアスに関する気づきや理解を得られた一方で、保育士自身のジェンダー観への気づきは低い結果となっていた。子どもを育てる立場となる保護者が自らのジェンダーを見直し、またジェンダーや性役割に関する正しい理解を促すプログラムを検討していく必要がある。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究の対象は、関東に所在する 5 施設の分娩施設を利用する 103 名の妊婦であった。サンプルサイズ、場所ともに限定されており、一般化できるとは言い難い。また、子どもの生育環境としての家庭のあり方を検討する際には、父親等その他育児に関わる保護者を対象とした調査も必要となる。今後、対象をより拡大し、保護者のジェンダーや多様なセクシュアリティに対する態度と、それに関連する因子を探索していくことが求められる。

本研究では、多様なセクシュアリティに対する態度の測定用具を独自に作成した。内容も、トランスジェンダーとホモセクシュアルのみに焦点を当てた項目であったため、多様化する性のあり方に即して、精度の高い測定用具を検討していく必要があると考える。

回答者の属性に関して、最終学歴や就労状況を訊ねる項目を設けなかった。仕事に就く女性は多く、労働力人口総数に占める割合は 43.4%となっている(厚生労働省, 2016)。性役割に対する態度や、多様なセクシュアリティについて教育を受ける機会、多様なセクシュアリティの人々に関わる機会の有無等に影響することが考えられるため、ジェンダーの平等性や多様なセクシュアリティの受容に関する因子として、回答者の背景を検討していく必要がある。

多様なセクシュアリティに関する知識が、性役割やトランスジェンダー・ホモセクシュアル等の多様なセクシュアリティに対する態度と関連することが示唆され、またその知識は教育によって得られる可能性があると考えられた。しかし、多様なセクシュアリティに関して、女性自身がどのような教育を受けたのか、詳細は捉えることができていない。大学や小学校・中学校・高校、職場の研修等それぞれの場でどのような内容が実施されており、それが女性の価値観、ジェンダーや多様なセクシュアリティに対する態度と理解にどのような影響を及ぼしているのかを調査する必要がある。

第6章 結論

本研究は、これから母親となる女性の、性役割やトランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度、多様なセクシュアリティに関する知識の現状を調査し、これらに関連する因子を探索することを目的とした。分娩施設を利用している妊婦を対象として質問紙調査を行い、103名の有効回答があり、以下のことが明らかになった。

- I. 約5人に1人の女性が、多様なセクシュアリティについて学んだことがあった。
- II. 性役割に対する態度は、多様なセクシュアリティに関する知識がある人が、平等志向的である傾向にあった。
- III. トランスジェンダー・ホモセクシュアルに対する態度は、多様なセクシュアリティに関する用語等の知識がある女性、多様なセクシュアリティの身近な知り合いを持つ女性、性役割に対する態度得点が高い女性が、肯定的な態度を示す傾向にあった。
- IV. 多様なセクシュアリティに関する知識得点は、多様なセクシュアリティに関して教育を受けたことのある女性、多様なセクシュアリティの身近な知り合いを持つ女性のほうが、そうでない女性より有意に高かった。
- V. 女性は子どもの性に関して、「(子どもが性的マイノリティであった場合の)認めたい気持ちと“普通”でいてほしい気持ちのジレンマ」「社会的には性の多様性を受け入れられるが、自分の子どものこととなると不安」「性教育の実施に関する不安」「親の性役割に対する態度が子育てに及ぼす影響」などの不安を抱えていた。

女性の約2割が多様なセクシュアリティに関する教育を受けているが、生殖や感染症に関する性教育と比べ、普及していると言い難い。しかし、知識を持つことが、性役割に対する平等志向的な態度、トランスジェンダーやホモセクシュアルに対する肯定的な態度に関連することが示された。また、多様なセクシュアリティに関する知識は、多様なセクシュアリティに関して教育を受けていること、多様なセクシュアリティの身近な知り合いがいることと関連していたため、ジェンダーやセクシュアリティの多様なあり方を含め、教育や交流の機会を検討していくことが求められる。

文献

- 東 清和, 鈴木 淳子.(1991).性役割態度研究の展望. *心理学研究*,62(4),270-276. doi: 10.4992/jpsy.62.270
- 阿部 真美子, 川上 哲夫, 沢登 芙美子, 高野 牧子, 坂本 玲子, 出口 泰靖, 池田 政子.(2000).ジェンダー・フリー教育研修プログラムの実践的研究：保育者・保護者を対象として. *日本保育学会大会研究論文集*,(53),704-705.
- 青野 篤子.(2007).男女平等とジェンダーに対する保育者の意識. *福山大学人間文化学部紀要 = Journal of the Faculty of Human Cultures and Sciences, Fukuyama University*,7,65-79.
- 青野 篤子, 金子 省子.(2008).保育にかかわる保護者のジェンダー観. *日本家政学会誌*,59(3),135-142. doi: 10.11428/jhej.59.135
- 土肥 伊都子.(1996).ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成. *教育心理学研究*,44(2),187-194. doi: 10.5926/jjep1953.44.2_187
- 土肥 伊都子.(2011).家族内のジェンダーの社会化に関する実証的検討 世代間の関連ときょうだい構成に注目して. *家族心理学研究*,25(1),1-12.
- 江原 由美子.(2007).ジェンダー・フリー・バッシングとその影響. *年報社会学論集*,2007(20),13-24. doi: 10.5690/kantoh.2007.13
- 遠藤 まめた.(2015). 性別自認(性同一性障害・性別違和). *季刊セクシュアリティ*.72,80-81
- 藤田 由美子.(2007).子どもの「ジェンダーと身体」をめぐる意識構造 幼児保護者への質問紙調査を手がかりに. *九州保健福祉大学研究紀要*,(8),61-70.
- 藤山 新, 飯田 貴子, 風間 孝, 藤原 直子, 吉川 康夫, 来田 享子.(2014).体育・スポーツ関連学部の大学生を対象としたスポーツと性的マイノリティに関する調査結果. *スポーツとジェンダー研究 = Journal of Sport and Gender Studies : JSGS*,12,68-79.
- 福島 静恵.(2015).多様性を認め合う関係づくりを目指したセクシュアリティ教育の試みー支援教育の視点に立った組織的な取組を通してー. *神奈川県立総合教育センター長期研究員研究報告*.13,55-60.
- 福島 裕子.(2009).若者の自主企画による性の健康とセクシュアリティに関する情報発信の効果. *岩手県立大学看護学部紀要 = Journal of the Faculty of Nursing, Iwate Prefectural University*,11,59-70.

- 二羽 泰子.(2015).マイノリティに非排除的な学校への変容. *教育社会学研究*, 97,25-45. doi: 10.11151/eds.97.25
- Susan Grombok& Robyn Fivush(1994).*Gender Development*. Cambridge University Press. (ゴロンボク&フィバッシュ 小林芳郎&瀧野揚三(訳)(1997). *ジェンダーの発達心理学*.田研出版株式会社).
- 羽入 雪子.(2017).性の多様性—医療を脱した LGBT —. *八戸学院短期大学研究紀要*,44,41-53.
- 針間 克己.(2016).セクシュアリティと LGBT (LGBT と性別違和) -- (LGBT の概念と現状). *こころの科学*,189,8-13.
- 針間 克己.(2016).性別違和のメンタルヘルス (特集 小児の性同一性障害・性別違和). *小児科*,57(11),1305-1309.
- Gregory M. Herek(1994).*The Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale*.Retrieved from. lgbpsychology.com/html/atlgfile.pdf.
- 日高 庸晴(2015).教職員 5979 人の LGBT 意識調査レポート.Retrieved from.www.health-issue.jp/kyouintyousa201511.pdf.
- 日高 庸晴.(2016).ゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルス (LGBT と性別違和) -- (LGBT の概念と現状). *こころの科学*,189,21-27.
- 東 優子.(2016).ジェンダーの多様な子どもたちの健康と権利 (特集 小児の性同一性障害・性別違和). *小児科*,57(11),1319-1325.
- 堀 成美.(2001).学校の性教育は時代のニーズに答えているか (特集 2 ジェンダー問題の今を探る). *児童心理*,55(14),1421-1425.
- 堀部 美穂,渡邊 正樹.(2012).家庭における性教育のための研修プログラムの開発と評価 : 小学生の保護者を対象として. *東京学芸大学紀要.芸術・スポーツ科学系*,64,191-199.
- 星野 恵.(2009).学校教育とジェンダー (特集 性と生のデータ集(2)). *セクシュアリティ*,42,80-85.
- 池田 政子,高野 牧子,阿部 真美子,沢登 芙美子,池田 充裕.(2005).ジェンダーに向き合う保育専門職の養成. *保育学研究*,43(2),245-255. doi: 10.20617/reccej.43.2_245
- 池上 知子.(2014).差別・偏見研究の変遷と新たな展開:—悲観論から楽観論へ—. *教育心理学年報*,53,133-146. doi: 10.5926/arepj.53.133
- 石原 英樹.(2017).性的マイノリティをめぐる地域環境 : 「世界価値観調査」による地域差分析と地域サポート組織の取り組み. *明治学院大学社会学・社会福祉学研究 = the Meiji*

Gakuin Sociology and Social Welfare Review, (147), 1-20.

石井 秀宗.(2007).統計分析のここが知りたい:保健・看護・心理・教育系研究のまとめ方.60-62.文光堂.

石倉 洋子.(1998).学校におけるジェンダー・バイアス:ジェンダー・フリーな教育のために. *白鷗大学論集: The Hakuoh University Journal*, 13(1), 123-146.

石丸 径一郎.(2002).マイノリティ・グループ・アイデンティティ:人はいかにして自らに付与された差異を取り扱うか. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, 41, 283-290.

石丸 径一郎.(2004).性的マイノリティにおける自尊心維持—他者からの受容感という観点から—:他者からの受容感という観点から. *心理学研究*, 75(3), 191-198. doi: 10.4992/jjpsy.75.191

Butler Judith P(1990). *Gender trouble feminism and the subversion of identity*. Retrieved from http://lauragonzalez.com/TC/BUTLER_gender_trouble.pdf.

我部山 キヨ子, 寺田 香里, 池田 浩子, 宮崎 つた子, 佐野 和香, 矢野 恵子, 杉本 陽子.(2003).性役割観の世代間比較に関する研究—幼児と青年の父母の調査より—. *母性衛生*, 44(2), 274-280.

金子 省子, 青野 篤子.(2004).保育所・幼稚園におけるジェンダーをめぐる課題. *愛媛大学教育学部紀要.第i部, 教育科学*, 50(2), 131-139.

加藤 千恵子, 高岡 哲子, 鹿野 友恵, 小田 明美.(2010).小学第 5 学年の自己概念とジェンダー・アイデンティティに関連した実態調査「命の授業」前後の比較から. *名寄市立大学紀要*, 4, 17-25.

亀石 知美, 下見 千恵.(2017).第 1 子に小学生がいる保護者の家庭で性教育を行う際の支援に関する検証:父母間での性教育に関する意識の違いについて. *日本赤十字広島看護大学紀要 = Bulletin of the Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing*, 17, 1-7.

小出 寧.(1999).ジェンダー・パーソナリティ・スケールの作成. *実験社会心理学研究*, 39(1), 41-52. doi: 10.2130/jjesp.39.41

厚生労働省.(2016).働く女性の状況.平成 28 年版働く女性の実情. Retrieved from <http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/16.html>.

倉敷市教育委員会.(2017).人権教育実践資料 2 性の多様性を認め合う児童生徒の育成. Retrieved from <http://www.city.kurashiki.okayama.jp/30449.htm>.

栗原 有果.(2011).ジェンダー・タイプと家族イメージに関する研究. *創価大学大学院紀*

要,(33),167-195.

増田 安代,今村 恭子.(2005).高校生の性教育に関する課題を探る : 学校と家庭で享受した性教育と性への認識調査を通して. *九州看護福祉大学紀要*,7(1),79-88.

三木 佳子,法橋 尚宏,前川 厚子.(2013).わが国の保健医療領域におけるセクシュアリティの概念分析. *日本看護科学会誌*,33(2),70-79.

三木 幹子,植木 由香.(2010).女子大学生と女子高校生の恋愛観・結婚観とジェンダー意識との関係. *広島女学院大学論集*,60,95-109.

三村 保子,力武 由美.(2006).保育・子育て実践における「個の尊重」: ジェンダーの視点から再考する(短期大学部 保育科). *西南女学院大学紀要*,10,143-152.

三村 保子,力武 由美.(2007).保育・子育て実践に関する「参加型ワークショップ」を用いた: ジェンダー・バイアスへの「気づきプログラム」および「評価方法」. *西南女学院大学紀要*,11,163-171.

宮本 純子.(2007).乳幼児をもつ母親の育児不安についての研究 ライフコース、性役割態度、時間的展望との関連から. *心理臨床学研究*,25(3),346-355.

百瀬 靖子.(2006).女子大生とその家族のジェンダーバイアス : 2000・2001・2002・2003・2004 (第 i 報) 年中行事編. *東京家政大学研究紀要*,1, 人文社会科学,46,91-100.

百瀬 靖子.(2007).女子大生とその家族のジェンダーバイアス (第 ii 報): 家族文化としての生活場面編. *東京家政大学博物館紀要*,12,13-26.

百瀬 靖子.(2008).女子大生とその家族のジェンダーバイアス (第 iii 報): 生活文化としての夫婦関係編. *東京家政大学博物館紀要*,13,21-38.

文部科学省.(2015).性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施について.

Retrieved from.

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468.htm[2017.06.21].

文 吉英.(2015).日本における母親の教育価値観及び子どもへの期待が養育態度に与える影響: 首都圏に居住する母親を中心に. *言語文化と日本語教育*,50,81-90.

森 美加,高橋 道子,牛島 定信,中山 和彦.(2005).性同一性障害における性役割志向. *臨床精神医学*,34(7),951-957.

森 良一.(2008).学校における性に関する指導について(学習指導要領に基づいて).

Retrieved

from.www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001dh87-att/2r9852000001dhhq.pdf

- 森永 康子.(2001).家庭で健康なジェンダー観を育成する (ジェンダー問題の今を探る). 児童心理,55(14),120-125.
- 森脇 裕美子.(2012).欧州におけるセクシュアリティ教育 充実への取組み .Retrieved from.www.jase.faje.or.jp/jigyo/journal/seikyoiku_journal_201206.pdf
- 森屋 宏美, 石橋 宏之, 和田 久美子.(2012).幼児期の母親が理解する「人の多様性」. 日本遺伝看護学会誌,10(2),3-9.
- 向田 久美子.(1998).子どもの偏見に及ぼす親の影響について. 性格心理学研究,6(2),82-94. doi: 10.2132/jjpjspp.6.2_82
- 村井 文江, 江守 陽子.(2014).小学校 3 年生の保護者がとらえる"性教育"と"家庭における性教育の取組み"に関する質的分析 思春期の子どもを持つ家庭における性教育の支援の検討に向けて. 思春期学,32(1),176-187.
- 村松 十和.(2002).思春期の性的成熟とジェンダー意識 身体発育の自己受容を媒介として. 岐阜医療技術短期大学紀要,(18),9-30.
- 村松 泰子.(2003).学校教育とジェンダー:研究と実践の動向. 学術の動向,8(4),36-40. doi: 10.5363/tits.8.4_36
- Julie L. Nagoshi, Katherine A. Adams, Heather K. Terrell, Eric D. Hill, Stephanie Brzuzy & Craig T. Nagoshi(2008).*Gender Differences in Correlates of Homophobia and Transphobia*. Retrieved from. https://www.researchgate.net/publication/226589320_Gender_Differences_in_Correlates_of_Homophobia_and_Transphobia[2017.06.21].
- 内閣府男女共同参画局.(1999).男女共同参画社会基本法 .Retrieved from. <http://www.gender.go.jp/about/danjo/law/kihon/9906kihonhou.html>
- 中井 美樹.(2000).若者の性役割観の構造とライフコース観および結婚観. 立命館産業社会論集, 36(3), 117-127.
- 中塚 幹也.(2013).「性同一性障害」を性教育で取りあげる. Retrieved from http://www.jase.faje.or.jp/jigyo/journal/seikyoiku_journal_201308.pdf.
- 中塚 幹也.(2016).性同一性障害：総論(特集 小児の性同一性障害・性別違和). 小児科,57(11), 1299-1304.
- 中村 愛.(2016).多様なセクシュアリティの人々に対する看護職者の態度とケアの困難感に関連する要因の探索.聖路加国際大学修士論文.

- 西村 良二.(2014).【新しい精神疾患の診断・統計マニュアル(DSM-V)ガイド】 ジェンダー
ディスフォリア(性別違和)とパラフィリア障害. *医学のあゆみ*,248(3),215-218.
- 野村 明子, 藪本 紗智子, 東 孝子, 羽座 典子, 朝飛 きよみ, 井上 ひさの, 猿渡 善
治.(2001).人工妊娠中絶を受けた女性の意識調査 避妊と STD について. *母性衛
生*,42(4),581-590.
- NPO 法人性同一性障害支援機構.(2014). *性同一性障害者数*.Retrieved from
<http://www.npogid.or.jp/lgbt/size/>.[2017.06.22]
- 及川 裕子.(2001).幼児期の性教育の課題：保育者の意識調査を通して. *日本赤十字武蔵野
短期大学紀要*,14,159-164.
- 岡垣 竜吾.(2015).脳の性分化と性別違和 (特集 いま,性分化とその異常を考える). *産婦人科
の実際*,64(10),1289-1293.
- 岡崎 愉加.(2014).思春期の性に関する子育て支援：親が性教育を実施していない理由. *日
本看護学会論文集.母性看護*,44,66-68.
- 斉藤 早苗, 末原 紀美代.(2007).就労女性の性感染症に関する知識と意識. *母性衛生 =
Japanese Journal of Maternal Health*,47(4),571-581.
- 坂口 由紀子, 橋本 紀子.(2009).親の性役割態度が養育態度および幼児の社会的行動に与え
る影響. *女子栄養大学紀要*,40,69-77.
- 坂口 由紀子, 宍戸 路佳, 久保 恭子, 後藤 恭一.(2015).看護系大学生のジェンダー因子構
造と親のイメージとの関連. *教育学研究室紀要：「教育とジェンダー」研究*,12,22-29.
- 坂口 由紀子, 橋本 紀子.(2009).親の性役割態度が養育態度および幼児の社会的行動に与え
る影響. *女子栄養大学紀要*,40,69-77.
- 佐野 まゆ, 高田谷 久美子, 近藤 洋子.(2007).大学生における性役割志向によるライフコ
ース観の比較. *山梨大学看護学会誌*,6(1),45-52.
- 佐々木 掌子.(2007).性同一性障害当事者におけるジェンダー・アイデンティティと典型的性
役割との関連. *心理臨床学研*, 25(2), 240-245.
- 佐々木 掌子.(2016).小児の性別違和と性同一性障害：総論 (特集 小児の性同一性障害・性
別違和). *小児科*,57(11),1311-1318.
- 佐々木 掌子, 尾崎 幸謙(2007).ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成. *パーソナリティ
研究*,15(3),251-265. doi: 10.2132/personality.15.251
- 佐藤 和順, 田中 亨胤.(2003).幼稚園におけるジェンダー・フリー・プログラムに関する研

- 究--ジェンダー・バイアス・フェードアウト保育を目指して. *教育実践学論集*, (4), 21-32.
- Edward Schiappa, Peter B. Gregg & Dean E. Hewes (2005). *The Parasocial Contact Hypothesis*. Retrieved from.
<https://www.google.co.jp/search?q=The+Parasocial+Contact+Hypothesis.&oeq=The+Parasocial+Contact+Hypothesis.&aqs=chrome..69i57j0j69i60.1776j0j8&sourceid=chrome&ie=UTF-8#>.
- 清水 隆子.(2003). 幼児の色彩選好と親のジェンダー意識：ピンク色選好にみられるジェンダー・スキーマー. *早稲田大学大学院教育学研究科紀要. 別冊*, 11(1), 87-95.
www.sfu.ca/psyc/faculty/wrights/publications/JPSP1997.pdf.
- 杉浦 郁子.(2013). 「性同一性障害」概念は親子関係にどんな経験をもたらすか：—性別違和感をめぐる経験の多様化と概念の変容に注目して—. *家族社会学研究*, 25(2), 148-160.
doi: 10.4234/jjoffamilysociology.25.148
- 鈴木 康江, 佐々木 くみ子, 片山 理恵, 前田 隆子.(2005). 思春期性教育活動に向けての基礎調査：中学生, 保護者, 教師の意識調査から. *母性衛生 = Japanese Journal of Maternal Health*, 45(4), 512-517.
- Atsuko Suzuki (1991). Egalitarian sex role attitudes: Scale development and comparison of American and Japanese women. *Sex Roles*. 24(5). 245-259.
- 鈴木 淳子.(1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成. *心理学研究*, 65(1), 34-41. doi: 10.4992/jjpsy.65.34
- 鈴木 淳子.(1996a). 若年女性の平等主義的性役割態度と就労との関係について：就労経験および理想の仕事キャリア・昇進パターン. *社会心理学研究*, 11(3), 149-158. doi: 10.14966/jssp.KJ00003724693
- 鈴木 淳子.(1996b). 若年女性のキャリア選択規定要因に関する縦断的研究 同一組織における就労継続および転職：同一組織における就労継続および転職. *心理学研究*, 67(2), 118-126. doi: 10.4992/jjpsy.67.118
- 鈴木 淳子, 柏木 恵子 (2006). *ジェンダーの心理学 心と行動への新しい視座*. 培風館.
- 高野 加奈恵, 我部山 キヨ子.(2017). 男女大学生の家事・育児に対する意識調査. *京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要：健康科学：Health Science*, 12, 1-7. doi: info:doi/10.14989/227228
- 玉里 八重子, 岡山 久代.(2006). 0～3 歳児を持つ母親の養育意識・行動に対する父親及び母

- 親の性役割態度の影響. *滋賀医科大学看護学ジャーナル*, 4(1), 40-44.
- 田代 美江子.(2014).学習指導要領の枠組みの中で日本の性教育の可能性を考える : 「日本における包括的性教育の手引き」構築の試み (特集 日本の性教育を展望する : 世界の
中の日本). *Sexuality*, 65, 22-37.
- 田代 美江子, 渡辺 大輔, 艮 香織.(2014).ジェンダー・バイアスを問い直す授業づくり: 「性の多様性」を前提とする中学校の性教育. *埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要 = Journal of Integrated Center for Clinical and Educational Practice*, (13), 91-98.
- 田代 美江子(2015). リプロダクティブ・ヘルス/ライツ(性と生殖の健康と権利). *季刊セクシュアリティ*. 72, 89-91.
- 立石 宏昭.(2002).社会福祉教育現場における価値観の変容--精神障害者観の意識調査と実践教育. *職業リハビリテーション*, 15, 45-51.
- 戸口 太功耶, 葛西 真記子.(2015).性の多様性に関する教育実践の国際比較. *鳴門教育大学学校教育研究紀要*, (30), 65-74.
- 富田 道子.(2015).女子学生の性意識・性行動に着目して : 大学における「セクソロジー」の授業の効果. *広島都市学園大学雑誌 : 健康科学と人間形成 = Journal of Hiroshima Cosmopolitan University : Health Sciences and Human Formation*, 1(1), 29-39. doi: info:doi/10.18883/johcu.0101.04
- 内田 伸子, 田中 京子, 荻原 万紀子, 菊池 美千世, 増田 かやの, 富山 尚子.(2006).ジェンダーフリー教育の実践研究とその普及 : ジェンダーをめぐる高校生とその両親の意識. *お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要*, 3, 89-96.
- 上野 淳子.(2008).心理学における性的マイノリティ研究:教育への視座. *四天王寺大学紀要*, (46), 73-83.
- 魚橋 慶子.(2009).性の多様性に対応する人権教育についての考察--大学教育への提案. *東北学院大学教育研究所報告集*, 9, 49-62.
- 渡辺 大輔.(2015a). 性(的)指向. *季刊セクシュアリティ*. 72, 84-85.
- 渡辺 大輔.(2015b).性の多様性. *季刊セクシュアリティ*. 72, 77-79.
- 渡邊 典子, 石崎 トモイ, 池田 かよ子.(2004).大学生の性の実態と今後の性教育のあり方
大学生が受けてきた性教育,性に関する悩み,知識や意識,対処行動の調査から. *思春期学*, 22(4), 547-554.

- World Association for Sexual Health (2005). モントリオール宣言 “ミレニアムにおける性の健康” . Retrieved from. www.jex-inc.co.jp/assets/images/montreal.pdf.
- World Association for Sexual Health(2014). 性の権利宣言. Retrieved from.www.worldsexology.org/wp-content/uploads/2014/10/DSR-Japanese.pdf.
- World Health Organization(2006). *Defining sexual health: Report of a technical consultation on sexual health 28–31 January 2002, Geneva*. Retrieved from. http://www.who.int/entity/reproductivehealth/publications/sexual_health/defining_sexual_health.pdf?ua=1.
- Stephen C. Wright, Arthur Aron and Tracy McLaughlin-Volpe & Stacy A. Ropp (1997). *The Extended Contact Effect: Knowledge of Cross-Group Friendships and Prejudice*. Retrieved from.
- Lester W. Wright Jr., Henry E. Adams, & Jeffrey Bernat (2010). *The Homophobia Scale*. Retrieved from. <http://www.midss.org/content/homophobia-scale> [2017.08.11].
- 山口 創生, 三野 善央.(2007). 精神障害者に対する偏見減少のための教育的介入の効果 高校生における教育的介入の評価. *日本公衆衛生雑誌*, 54(12), 839-846. doi: 10.11236/jph.54.12_839
- 柳原 真知子.(2000). 看護学生のセクシュアリティとセクシュアリティ教育. *東北大学医療技術短期大学部紀要 = Bulletin of College of Medical Sciences, Tohoku University*, 9(2), 161-173.
- 安川 悦子.(1998). ジェンダーフリーが二十一世紀を切り拓く. *性と生の教育*, 25, 14-21.
- 横田 恵子.(2006). 包括的性教育の推進を阻むジェンダーフリー教育バッシング : Hiv/aids 予防教育を阻害する日本の現状(戦後 60 年・ポスト北京の 10 年). *女性学評論*, 20, 21-39. doi: info:doi/10.18878/00002326
- 吉川 麻衣子.(2017). 沖縄県の学校現場における「性の多様性」の実態 : 教職員を対象とした基礎調査をもとに. *沖縄大学人文学部紀要 = Journal of the Faculty of Humanities and Social Sciences*, (19), 1-15.
- 吉澤 昌恭.(2005). 「ジェンダー・ステレオタイプ」と「ジェンダー・フリー」. *広島経済大学研究論集*, 28(2), 1-24.
- 湯川 隆子, 石田 勢津子.(2005). ジェンダー認知の変容とその測定方法の検討. *奈良大学紀要*, (33), 81-93.

資料

資料 1 施設への研究協力依頼書

資料 2 対象者への研究協力依頼書

資料 3 質問紙

平成〇〇年〇月〇日

〇〇施設
〇〇殿
スタッフの皆様

研究ご協力をお願い

拝啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

私は、聖路加国際大学大学院看護学研究科ウィメンズヘルス・助産学専攻修士課程に所属する浅倉美貴と申します。

このたび、研究へのご協力をお願いいたしたく、お便りいたしました。

私は現在、「母親となる女性のジェンダー及び多様な性に関する認識の調査」というテーマで研究に取り組んでおります。

この研究では、子育て中の母親または母親になる女性のジェンダー・バイアス、性の多様性への態度及び認識について明らかにし、これらに関係する要因を探索することを目的としております。妊娠中の女性のジェンダーや性の多様性に関する認識を知ることにより、ジェンダーや性に関する正しい情報の提供や教育のあり方を探索することを目的としています。

この研究につきまして、妊婦健診にて御院に通院される妊婦の方々に研究協力（質問紙の回答と返送）をご依頼したく、またそれに関して御院のご理解とご協力を賜りたくお願い申し上げます。

敬具

記

1. 研究目的

本研究は、子育て中の母親または母親になる女性のジェンダー・バイアス、性の多様性への態度及び認識について明らかにし、これらに関係する要因を探索することを目的としています。

2. 研究方法

- 1) 調査方法：質問紙調査法による研究です（所要時間は5～10分程度です）。
- 2) 対象：貴院の妊婦健診に通う妊婦の方。初産婦、経産婦は問いません。

18歳以上の女性。

＊身体的・精神的な疾患等により、質問紙への回答が女性の大きな負担となりうる
と医療者によって判断された場合、除外します。

- 3) 調査手順：助産師に対象者の選定をしていただいた後、研究者が調査依頼書と質問紙を用いて協力依頼を行います。外来待合室にて記入していただく予定です。

4) 質問紙のご返送：御院の外来受付に、質問紙返送用の箱を設置させていただきたく
お願い申し上げます。

3. 研究への参加協力の自由意思

研究へのご協力は自由意思に基づき、ご協力が得られない場合でも、対象者に不利益が及ぶことはありません。

4. プライバシーおよび個人情報の取り扱い

プライバシー保護に十分に配慮し、質問紙は無記名といたします。研究者がカルテを拝見することはありません。

5. 研究協力者に予測される利益と不利益

研究協力者、また協力施設に対し、本研究による直接的な利益は期待できませんが、ジェンダーに関して悩みを持つ子どもが必要としている支援、そういった子どもを持つ女性が必要としている支援を検討するための一資料になると考えております。

アンケートの回答に際し、対象者には 5～10 分程度の時間的拘束が生じます。外来を担当なさる医師・助産師の皆様には、質問紙への回答が可能かを判断していただき、その旨研究者にお伝えいただくお手数をおかけします。

6. 収集データの管理方法

得られたデータは、すべて研究者のみが使用できる施設可能な場所に保管し、パソコンでの解析も研究者本人によるアクセスにとどめます。研究終了後は、5 年間保管したのち、確実に破棄いたします。

7. 研究結果の公表方法

本研究は、聖路加国際大学大学院の課題研究としてまとめ、学会や専門雑誌に発表する予定です。

8. 本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号 17-A067）を得て実施しております。

9. 研究に関するお問い合わせ

研究についてご不明な点、ご質問等ありましたら、お手数をおかけしますが、下記連絡先までご連絡ください。

以上

研究者：浅倉美貴

所属：聖路加国際大学大学院修士課程 助産学専攻

住所：〒104-0044 東京都中央区明石町 10-1

メールアドレス：_____@_____

指導教員：片岡弥恵子（聖路加国際大学大学院 助産学教授）

調査の概要とご協力のお願い

「母親となる女性のジェンダー及び多様な性に関する認識の調査」

聖路加国際大学大学院修士課程助産学専攻の浅倉美貴と申します。

この研究は、妊娠中の女性の、ジェンダーを中心とした性の多様性に対する認識を探索することを目的としています。皆さまにご回答いただいた研究結果をもとに、ジェンダーや性に関する正しい情報の提供や教育のあり方を探索することを目的としています。そこで、妊娠中の皆さまに、調査のご協力をお願いしたいと考えております。

- ・ 質問は無記名です。ご回答は強制的なものではありません。
- ・ 内容は、性の多様性への認識に関することです。
- ・ 質問紙は表紙や説明文を除き、全部で 4 ページあります。
- ・ 記入が終わりましたら、一緒に配布いたしました封筒に入れ、外来設置の回収ボックスにお入れください。
- ・ ご回答を途中でやめたいと感じた場合は、白紙のまま封筒に入れ、ご提出ください。

お忙しいところ恐縮ではございますが、ご回答は 月 日までにお願いいたします。

調査に関してご理解いただけましたら、ご協力をお願いいたします。

本研究に関する詳細をお知りになりたい場合、お手数をおかけしますが、その旨を下記連絡先までお伝えください（計画書や研究方法などをご提示できます。アンケートの回答等、皆様のプライバシーは保護されます）。また、ご意見・ご質問等がある際にも、遠慮なく下記にご連絡ください。

研究者：浅倉美貴（あさくらみき）

所属：聖路加国際大学大学院修士課程 助産学専攻

住所：〒104-0044 東京都中央区明石町 10-1

メールアドレス： _____@_____

指導教員：片岡弥恵子（聖路加国際大学大学院 助産学教授）

なお、調査へご協力していただくにあたり、以下のことをお約束いたします。

- ☐ 調査にご協力いただくか、辞退なさるか、自由に決めていただくことができます。
ご協力を得られない場合にも、不利益は生じません。
- ☐ 質問紙の提出をもって、研究に同意いただけたものといたします。
- ☐ 質問紙は無記名のため、個人が特定されることはありません。また、ご提出後は、無記名であるため、同意の撤回は承りかねます。
- ☐ 質問紙には、ジェンダーを中心とした性の多様性に関する質問や、個人の認識を問う内容が含まれています。
ご回答を途中でおやめになりたい場合は、やめていただいてもかまいません。また、白紙でご提出いただくこともできます。
- ☐ 本研究で得られたデータは、研究者本人のみが使用できるよう厳重に管理いたします。
データは、研究終了後 5 年間保存した後、確実に処分いたします。
- ☐ 本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号：17-A067）を得て実施しています。
- ☐ 本研究は、聖路加国際大学大学院の課題研究としてまとめ、学会や専門雑誌に発表する予定です。

妊婦の皆さまへ

「母親となる女性のジェンダー及び多様な性に関する認識の調査」

✿研究の目的✿

妊娠中の女性の、ジェンダーを中心とした多様な性に対する認識を探索することを目的としています。皆さまにご回答いただいた研究結果をもとに、ジェンダーや性に関する正しい情報の提供や教育のあり方を探索することを目的としています。

- 調査への参加、不参加は自由です。辞退されても、不利益は生じません。
- 回答したくない設問をとばすことや、途中でご回答をやめていただくことも、自由です。
- この質問紙は無記名です。個人が特定されることはありません。また、ご投函後は、無記名であるため、同意の撤回は承りかねます。
- 質問紙は4ページあります。
- 回答には5～10分程度を要します。

ご記入が終わりましたら、一緒にお渡しした封筒に入れ、外来受付にある回収ボックスにお入れいただくか、近くに研究者がおりましたらお声掛けください。

月 日までにお願いいたします。

(次回健診時に提出をお考えの方で、この日を過ぎてしまう場合は、11月中の投函をお願いいたします)

途中で回答をおやめになった場合は、そのままの状態で構いませんので、封筒に入れ、同様の方法でご提出ください。

ご質問等ありましたら、お手数をおかけしますが、依頼書記載の連絡先までお願いいたします。

よろしくお願いいたします。



研究にご協力いただける場合、以下の□にチェックをお入れになり、1～6の設問にお答えください。

私は、「母親となる女性のジェンダー及び多様な性に関する認識の調査」への協力に、

☐ 同意します。

1. 以下の文章について、現在、あなたがどのように感じているかをお尋ねします。

5つの選択肢から、あなたが感じていることを最もよく表している数字を一つ選んで、

○をつけてください。

	全くそう 思わない	そう 思わない	どちら でもない	そう 思う	とても そう思う
① 女性が社会的地位や賃金の高い職業を持つと結婚するのがむずかしくなるから、そういう職業を持たないほうがよい。	1	2	3	4	5
② 結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである。	1	2	3	4	5
③ 主婦が働くとき夫をないがしろにしがちで、夫婦関係にひびがはいりやすい。	1	2	3	4	5
④ 女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である。	1	2	3	4	5
⑤ 主婦が仕事を持つと、家族の負担が重くなるのでよくない。	1	2	3	4	5
⑥ 結婚後、妻は必ずしも夫の姓を名乗る必要はなく、旧姓で通してよい。	1	2	3	4	5
⑦ 家事は男女の共同作業となるべきである。	1	2	3	4	5
⑧ 子育ては女性にとって一番大切なキャリアである。	1	2	3	4	5
⑨ 男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることが非常に大切である。	1	2	3	4	5
⑩ 娘は将来主婦に、息子は職業人になることを想定して育てるべきである。	1	2	3	4	5
⑪ 女性は、家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いたほうがよい。	1	2	3	4	5
⑫ 女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をすることもそれと同じくらい重要である。	1	2	3	4	5
⑬ 女性はこどもが生まれても、仕事を続けたほうがよい。	1	2	3	4	5
⑭ 経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい。	1	2	3	4	5
⑮ 家事や育児をしなければならないから、女性はあまり責任の重い、競争の激しい仕事をしないほうがよい。	1	2	3	4	5

2. 以下の言葉について、3つの選択肢から当てはまるアルファベットを1つ選んで、○をつけてください。

	聞いたことがない	聞いたことはあるが 言葉の意味を知らない	聞いたことがあり 言葉の意味も知っている
① 同性愛	A	B	C
② 両性愛	A	B	C
③ 性同一性障害	A	B	C
④ ホモセクシャル	A	B	C
⑤ バイセクシュアル	A	B	C
⑥ トランスジェンダー	A	B	C
⑦ ゲイ	A	B	C
⑧ レズビアン	A	B	C
⑨ LGBT	A	B	C

3. 以下の問いについて、3つの選択肢から当てはまるアルファベットを一つ選んで、○をつけてください。

	正しい	正しくない	わからない
① ホモセクシュアルは、ゲイとレズビアンの人を指す。	A	B	C
② バイセクシュアルは、2人の男性を同時に愛する人を指す。	A	B	C
③ トランスジェンダーの人は、全て性同一性障害と診断される。	A	B	C
④ LGBT とは、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアルの人を指す。	A	B	C
⑤ 同性愛は、精神障害ではない。	A	B	C
⑥ 日本の法律では、同性のカップルは結婚できない。	A	B	C
⑦ 日本では、性同一性障害の人は無条件で戸籍上の性別変更ができる。	A	B	C
⑧ 自分の身体的な性別とは異なる性別で生きたいと願う人がいる。	A	B	C
⑨ 日本では、同性愛者や両性愛者、性同一性障害や LGBT などの人々の割合は、100人に1人である。	A	B	C
⑩ 同性愛者や両性愛者、性同一性障害や LGBT などの人々を象徴する色は、白色である。	A	B	C

4. 以下の文章について、現在、あなたがどのように感じているかお尋ねします。
5段階の選択肢から、あなたの気持ちにもっとも近い数字に○をつけてください。

	全くそう 思わない	そう 思わない	どちら でもない	そう 思う	とても そう思う
① 男性でも女性でもないという人は、どこかおかしいと思う。	1	2	3	4	5
② 前から知っている人に「昔は別の性別だった」と打ち明けられたら、うろたえてしまう。	1	2	3	4	5
③ 男性か女性かわからない人に街中で会ったら、その人を避けてしまう。	1	2	3	4	5
④ 誰かに会ったとき、その人が男性か女性かはつきりわかることは、重要なことだ。	1	2	3	4	5
⑤ 人間は性別を変えることはできない。	1	2	3	4	5
⑥ 同性愛者に対して、あまり良い思いを抱かない。	1	2	3	4	5
⑦ 同性愛も、性的指向のひとつとして受け入れられる。	1	2	3	4	5
⑧ 同性の性的な行為は、道徳的に良くないことである。	1	2	3	4	5
⑨ 同性愛者の結婚が、法律で認められても良いと思う。	1	2	3	4	5
⑩ 同性愛は、単に異なるライフスタイルであって、非難されるべきではない。	1	2	3	4	5

5. お子様の性に関して、困っていることや不安に感じていること（ご出産後、子育ての際に不安に思うかもしれないこと）を、ご自由にお書きください。経産婦の方は上のお子様に関すること、現在妊娠中のお子様に関すること、どちらでも構いません。

ix